

日蓮大聖人の、上行菩薩の自覚と、常不軽菩薩の自覚

廣田 頼道

日蓮大聖人が遺された、論文、御手紙の中に於いて、日蓮大聖人は、自らを【上行菩薩の再誕】と表現されています。と同時期に【常不軽菩薩の跡を継ぐ】という表現をされています。

一体これは、どういう事なのでしょう。何故、【上行菩薩の再誕】だけでは、駄目だったのでしょ。加えて、【常不軽菩薩の跡を継ぐ】と並記された意味は何なのでしょう。逆に【常不軽菩薩】だけでは、駄目だったのでしょ。何故、上行菩薩と、常不軽菩薩の二者を自らに重ね合わせたのか、ここでは、この点を整理し明らかにしたいとの理由で書き出した次第であります。

A 図

上行菩薩の自覚	常不軽菩薩の自覚
<p>②四條金吾殿御返事（全1117p） 文永9年（1272）5月2日 聖寿51歳 多宝塔中にして二仏並坐の時、上行に譲り給いし題目の五字を日蓮粗ひろめ申すなり、此れ即ち上行菩薩の御使いか、</p>	<p>①佐渡御書（全960p） 文永9年（1272）3月20日 聖寿51歳 日蓮は過去の不軽の如く当世の人々は彼の軽毀の四衆の如し人は替れども因は一なり、父母を殺せる人異なれども同じ無間地獄におつかなれば不軽の因を行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき</p> <p>※関連御書 日妙聖人御書（全1217p） 文永9年（1272）5月25日 聖寿51歳 日本第一の法華經の行者の女人なり、故に名を一つつけたてまつりて不軽菩薩の義になぞらえん、日妙聖人等云々</p>

④ 観心本尊抄（全254p）

文永10年（1273）4月25日 聖寿52歳

本門の四菩薩を顕わさず、所詮地涌千界の為に此れを譲り与え給う故なり、此の菩薩仏勅を蒙りて近く大地の下に在り正像に未だ出現せず末法にも又出で来り給わずば大妄語の大士なり、三仏の未来記も泡沫に同じ。

⑥ 萬年救護本尊讃文

文永11年（1274）12月 日 聖寿53歳

後五百歳之時上行菩薩出現於世始弘宣之

⑧ 法華初心成仏抄（全550p）

建治3年（1277）聖寿56歳

妙法の五字を弘め給はん智者をばいかに賤くとも上行菩薩の化身か又釈迦如来の御使かと思うべし。

⑨ 頼基陳状（全1157p）

建治3年（1277）6月25日 聖寿56歳

日蓮聖人は御經にとかれてましますが如くば久成如来の御使、上行菩薩の垂迹、法華本門の行者、五五百歳の大導師にて御座候

③ 観心本尊抄（全253p）

文永10年（1273）4月25日 聖寿52歳

一切世間の諸人威音王仏の末法の如く又我が弟子の中にも粗之を説かば皆誹謗を為す可し黙止せんのみ、求めて云く説かずんば汝慳貪に墮せん、答えて曰く進退惟谷れり試みに粗之を説かん、

⑤ 顕仏未来記（全507p）

文永10年（1273）5月11日 聖寿52歳

彼の二十四文字と此の五字と其の語殊なりと雖も其の意是れ同じ彼の像法の末と是の末法の初めと全く同じ彼の不軽菩薩は初随喜の人、日蓮は名字の凡夫なり。

⑦ 聖人知三世事（全974p）

建治元年（1275）聖寿54歳

日蓮は是れ法華經の行者なり不軽の跡を紹介するの故に軽毀する人は頭七分破、信ずる者は福を安明に積まん。

⑩ 諫暁八幡抄（全588p）

弘安三年（1280）12月 聖寿59歳

末法には一乗の強敵充滿すべし不軽菩薩の利益此れなり、各各我が弟子等はげませ給

へはげませ給へ。

※関連御書

妙法比丘尼御前御返事（全1419p）

弘安四年（1281）聖寿60歳

法門の故に人にもあだまられさせ給ふ女人、さながら不輕菩薩の如し

【上行菩薩とは】

身延日蓮宗系の思考を理解する為に、『法華経辞典』三喜房佛書林出版963p

ほんげぼさつ（本化菩薩）の項を、そのまま掲載

迹化菩薩に対する。久遠の本佛が、久遠に成仏を遂げた時の最初の弟子であるから、本佛の所化（教化された者）というので本化菩薩と称する。また娑婆世界の下、下方の空中に常住しているというので下方の菩薩、又は下方久住菩薩ともいう。本佛に召されて大地が裂け、その下方から涌出したので地涌菩薩とも称する。此の菩薩達は六萬恒河沙という無数の人員で、しかも皆な三十二相を具へた人格の具わった者である。その首席を上行、無辺行、浄行、安立行の四菩薩と名づけ、総ての菩薩の唱導師とされている、なほ迹化及他方の文殊、弥勒、観音等の菩薩と特に異なるのは、釈迦一代五十年の伝導中、法華経本門の初めの涌出品に突然現はれ、壽量品で釈迦自身の本地開顕の説を聞き、神力品で、結要付嘱を受け、次の嘱累品で忽ち退去して了ったことである。釈迦の涅槃にも臨まずまた他の説法会にも参聴せず、ただ本門の正宗（正説）だけであった。また佛陀の補處（候補）とされていた弥勒が、涌出品で此菩薩の無数有の出現を見て、その中の一人さえも識らなかったということ。言い換えれば弥勒の神通智力でも知る事の出来ない最高級の菩薩であるとの経意である。なほ此菩薩の靈格は涌出品に詳しく説かれている。法華経を通観して見ると、此菩薩がいかに重要な位置に在るかがわかる。日蓮の法華経行者としての理想は此菩薩の上に見出されたものである。

同『法華経辞典』897p

ふきょうぼさつ（不輕菩薩）の項

法華经常不輕菩薩品に説かれた菩薩で、過去威音王佛の世に出現し、民衆を礼拝して「我れ深く汝等を敬ふ。敢て輕慢せず。所以は如何。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作仏することを得べし」と常に四衆の礼拝するのを、大衆は罵詈したり、辱しめたり、又は石を投げつけ、棒で打ったりしたが、不輕はよくこれを忍んで少しも抵抗せず。ますます高唱して礼拝

を続け、兇暴な四衆も遂に皆救はれた。凡ての人に佛性の存在を認めて苟もこれを軽んじないという誓願を立てていたので、不軽と名づけたと。そしてこの積極的な下種の教化は末法の法華經の行者の眞の伝道態度であるといつて、日蓮は不軽を手本としたばかりでなく、一般に仏教徒から尊ばれた。

『法華經辭典』は以上で、以下は私の補足説明。

【本化の菩薩】

久遠実成五百塵点劫に、「我本行菩薩道」と、妙法蓮華經の信心修行の菩薩として精進した結果成仏する事が出来た釈尊に、その時教化された菩薩達。地涌の菩薩（四菩薩）等。

【迹化の菩薩】

三千年の昔、インドに生まれ、釈迦族の皇太子として育ち、出家し、悟りを開き、八万四千の説法をし、八十年の生涯を送った、釈迦牟尼仏の十大弟子を中心にした、文殊師利菩薩、普賢菩薩、觀世音菩薩、弥勒菩薩、藥王菩薩、勢至菩薩、弥勒菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩等々。これ等は三千塵点劫に大通智勝仏の16番目の息子の妙法蓮華經の説法を受け、妙法蓮華經の縁を受けているが、本人たちはすっかり忘れ、インド降誕の釈尊の弟子となり、初めから修行する縁を持つ。

※妙法蓮華經の法は、宇宙の始まりと言われるビッグバンが起こる、それ以前の永遠の過去から存在し、永遠の未来に貫かれ存在しているのであります。

大学生になって、五百塵点劫と久遠元初本因妙の概念が、どうしても分からないので、数人の先輩に、「久遠元初は五百塵点劫より古いから尊いんだと大石寺では言いますが、五百塵点劫でも充分ビッグバンを時間的に越えていますよ。そうすると日蓮大聖人は何処にいたんですか？」と聞いてみた。すると、「違う惑星で妙法蓮華經の法を説いていたんだ。」「じゃあ、そこにも日本語があつて、南無妙法蓮華經と説いたんですか？」という「そりゃそうだろうよ」と、仏教經典のどこにも無い話になって行きます。しかし、釈尊の存在よりも古い久遠元初から日蓮大聖人はいたという事になれば、当然、日蓮大聖人は『聖書』に示される、荒唐無稽の神の天地創造話と同じになり、日蓮大聖人が妙法を作り、天地創造し、神と日蓮大聖人とどちらが偉大かという、荒唐無稽の、漫画の様な話になってしまうのであります。五百塵点劫より古い久遠元初より本仏であらせられたと言うならば、それでは、日蓮大聖人は五百塵点劫の時代、三百塵点劫の時代、釈尊在世の時代、どこで、どうして、何をしていたのでしょうか。もし久遠元初から元々本仏であったと言うならば、日蓮大聖人の大難四ヶ度小難数知れずの、法華經身読の生涯は、一切衆生に見せる為の、やら

せ演出という事になってしまいます。そういう事ならば、日蓮大聖人は釈尊と同じ完全無欠な仏で、産まれて来る前から仏で、おぎゃあと泣いて産まれた存在も本佛が産まれたという事であり、凡夫の振りをしていただけの、私達の様な、末法の荒凡夫が成道を遂げる御手本では無いという事になります。この事からも、まず日蓮大聖人が仏として存在し、その日蓮大聖人が説いたのが、一念三千の法という順序は、有り得ないのであります。

【法本尊】よりも【人本尊】だと主張する人々がいますが、【人勝法劣】を主張するならば、南無阿弥陀仏や南無釈迦牟尼仏や南無大師遍照金剛と同じになり、本尊は【南無日蓮】御題目も【南無日蓮】でなければいけない事になります。「法華經の題目を以って本尊とすべし」妙法蓮華經の法を妙法蓮華經の行者としての凡夫が悟り、仏となり、衆生に説いた。この順序からすれば、【人勝法劣】も【法勝人劣】も、双方に勝劣では無く、【法前仏後（法前人後）】の順序なのであります。

五百塵点劫より本因妙久遠元初はもっと古いと、時間の古さを競っている人達がありますが、そんな事は愚の骨頂であります。眞実の法は、時空を超え、いついかなる時空に於いても眞実なのであります。眞実に古い新しいは無いのであります。【久遠即末法】と言われる世界なのであります。仏は人間が、獣と同じ生活から進化し、言葉と文字を持ち、智恵の遺産を子孫に繋いで行けるようになると、衣食住と子孫の繁栄、一族の繁栄拡大だけを考えていた時代から進んで、死んだおじいさん、おばあさんに似た子供が産まれて来る。生命とは何なのだろう、産まれて来る前の生命、死んでから生命は、どうなっているんだろうと思案するようになります。自然の脅威から靈威を感じ、自然の偉大さに畏敬の念を抱き、精靈崇拜が起って来ます。この様な思いから、この世の中に宗教が次々と生まれ、神や仏を絶対者とし、その絶対者が、法をはじめ、この世の中の全てを造った。という聖書に書かれる様な言った者勝ちの荒唐無稽な絶対者がいて、その存在に丸投げして全てを任せ、自らは思考しない、考えても分からんと、仏教は基本的に仏が天地を創造したという教えでは無いのですが、仏教の中でも何も考えないで全てを阿弥陀如来に任せなさいとか、大日如来は全ての仏を産んだ仏だから一番偉大な大日如来に全てを任せなさい。という自己を否定し、ひたすら、天地創造は言わないけれど絶対者という仏におすがりする信仰。そして、仏教の中でも法華經だけが、自他の生命の本質に仏の生命が平等に具わるという教えを示します。それぞれ全ての生命、心をどう考えるのかで枝別れして行ったのであります。世の中の人々は、どの宗教も似たり寄ったりで、目的も同じで、「法論は、どちらが勝っても釈迦の恥」皆自分の所が正しいと言って争い宗教戦争で殺し合っているんだろうと思込んでいますが、依り所とする

教えが違えば、一つ一つの宗教は皆違います。「鯛の頭も信心」と揶揄されますが、「鯛の頭」では一切衆生平等成仏は出来ないのであります。他力として神や阿弥陀如来や大日如来や釈迦如来に全てを任せても、一切衆生平等成仏は出来ないのであります。一切衆生平等成仏が説かれていない宗教は、当然、一切衆生を救う事の出来る宗教では無いのであります。信じる者だけを救う教えでは無く、信じない人まで救う教えが説かれていなければ、本物の宗教とは言えないのであります。

妙法蓮華経従地涌出品第十五（開結473p）

四菩薩には、仏と同様に、常（三世に亘り一貫して常住不変で生滅無し）、楽（生死の苦しみを解脱し、涅槃の楽を得る）、我（仏の大我は凡夫の小我からかけ離れた自在な徳）、淨（種々の煩惱が悉く払われ淨い事）の四徳が、（仏の生命に具わるという事は、凡夫の生命にも佛性が具わるのだから、凡夫の生命にも四徳が具わる）を表現している。

日蓮大聖人が、自らを【上行菩薩の再誕】と称した理由は、日蓮大聖人は、承久四年二月十六日西暦1222年、安房小湊片海の漁師の子として産まれます。末法に入って170年目にあたります。12歳で出家し、一切の經典、各宗各派の依經、解釈書を読み学び、建長五年四月二十八日一切の經典の中で、法華経だけが、一切衆生平等成仏の法を明かしている事に目覚め、立教開宗し、法華経の行者として旅立ちます。そして、信心修行の日々の中で日蓮大聖人は幾度も幾度も反芻して考えます。日蓮は、末法に入って170年目に東夷日本へ産まれて来た。出家してから多くの經典、典籍を読み学んで来たけれども、法華経に示される、末法に妙法蓮華経の法を伝えるという上行菩薩の働きをしている信仰者を、見聞した事が無い、一体誰なんだろう、何処にいるんだろう、もう現れているのか、まだ現れていないのか、日蓮が知らないだけなのだろうか。日蓮でも、法華経が唯一の一切衆生平等成仏の法である事が分かっているのに、何故これ程明らかに法華経に説かれている事を、世の中の人々は分かろうとしないのだろうか。上行菩薩が出て来るまでに、少しでも上行菩薩が説きやすい様に、露払いの様に、誤解や混乱が生じない様に、流布しやすい様に、この国土世間に、法華経が唯一無二、一切衆生平等成仏の法である事を、魁として示しておこう。この志を常に心に置きながら、法華経の行者として、法華経身読に精進し、より一層、法華経の中に、一切衆生平等成仏の法を探究し、余すところなく、一切衆生に説き伝える事に勤めます。しかし、日蓮大聖人が、どれ程恋焦がれても、上行菩薩の再誕とおぼしき者は現れません。そのうち龍ノ口法難、佐渡流罪の国家権力からの絶命に繋がる難を迎えた時に、日蓮大聖人は、自身が

上行菩薩の再誕その者であると自覚されます。現実には①の佐渡御書の常不輕菩薩の自覚の方が前に表れ、次に②の四条金吾殿御返事の上行菩薩の御使いかとの、まだ躊躇する表現で示され、始まっています。

一般世間の日蓮信仰者の中では、日蓮は【上行菩薩の再誕】の方に、重きを置かれている感があります。身延系日蓮宗の、【日蓮大菩薩】という呼称規定等は、その事を意識しての事だと考えます。もちろん、【再誕】は、再び誕生するという、上行菩薩そのものという意味、上行菩薩自身が日蓮として末法に生れる。日蓮だけと受け取る重い言葉であるという点も当然であります。

【常不輕菩薩の跡を継ぐ】の方は、日蓮一人のみでは無くて、全ての人々が法華經の行者として生きる事によって【常不輕菩薩の跡を継ぐ】事になり、日蓮は、その魁としての【常不輕菩薩の跡を継ぐ】という表現であります。つまり、【上行菩薩の再誕】は日蓮一人のみ、【常不輕菩薩の跡を継ぐ】は、末法の一切衆生という表現になります。

法華信仰者の中では、【常不輕菩薩の跡を継ぐ】は、後追いの二の次の様な感があり、あくまでも【上行菩薩の再誕】がメインの様な、まず【上行菩薩の再誕】が表に出てくる扱いをされている様に、私は感じますが、その印象は間違いであって、観点、切り口が、全く違うのであります。

御書の中に、上行菩薩、常不輕菩薩と表現していないけれども、明らかに行間には、そう言っているのではないかという御文の場合、含みをどう解釈するかは個々の感覚ですので、その解釈が的を得ていたとしても、その御文は、日蓮大聖人の躊躇いの方が強かったとして、この対比表には入れませんでした。

例を挙げれば、「寂日房御書」弘安二年九月十六日聖寿58歳（全903p）

「日蓮となのる事自解仏乗とも云いつべし、かやうに申せば利口げに聞えたれども道理のさすところさもやあらん、經に云く「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」と此の文の心よくよく案じさせ給へ、斯人行世間の五の文字は上行菩薩末法の始めの五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明をさしいだして無明煩惱の闇をてらすべしと云う事なり、日蓮は上行菩薩の御使いとして日本国の一切衆生に法華經をうけたもてと勧めしは是なり」

立教開宗前夜、出家時に道善房より賜った「蓮長」を、自ら「日蓮」に改名した時の、信仰心情を振り返り表明されている部分であります。明らかに法華經の行者として旅立つ前から、日蓮以外に上行菩薩の（【再誕】ではなく、【御使い】の表現）使命と責任を担う者

はいないという自覚が【日蓮】と名乗る由縁であると示されていますが、やはり、【上行菩薩の再誕日蓮】との表現はされていませんし、法華經の行者としての出発前夜の信念、目標であって、確証確認は一切得られていない状況ですので、A図左には入れませんでした。

又、「妙密上人御消息」建治二年三月五日聖寿55歳（全1239p）

「上行菩薩の出現して弘めさせ給ふべき妙法蓮華經の五字を、先立て、ねごとの様に心にもあらず、南無妙法蓮華經と申し初て候し程に唱ふる者なり」

これも、同様の理由でA図左には入れませんでした。

語句が表出する御書で選別すると、枠内の左右の内容と年代順になります。つまり、【常不輕菩薩の跡を継ぐ】の自覚の方が先に現れているのであります。決して【上行菩薩の再誕】がメインで【常不輕菩薩の跡を継ぐ】が、二の次ではない事が分かります。

話を戻して、まず日蓮大聖人の主要項目の様に一般世間で考えられている、【上行菩薩の再誕】の方から、論を始めたいと考えます。

法華經化城喻品第七（開結311p）には、

「我過去世の無量無邊劫を念うに、仏兩足尊有しき、大通智勝と名づく、人あつて力を以つて三千大千の土を磨つて（中略）彼の仏の滅度より來、是の如く無量劫なり」

と、大通智勝仏の滅度以來、甚だ久遠であると説いた上で、釈尊と結縁の有る衆生の始まりを示しています。ここを三千塵点劫と言います。

つまり、釈尊は三千塵点劫の過去に、大通智勝仏の16番目の子供として生まれ育てられ、大通智勝仏から、法華經の説法を受け、法華經の信行に勤め、その縁によって大通智勝仏滅後、16人の兄弟はそれぞれ法華經の説法教化をするようになります。因みに阿彌陀如来は兄弟9番目、第一子長男は智積菩薩であります。阿彌陀如来が此処に出て來るという事は、阿彌陀如来は法華經の行者として妙法蓮華經の法を悟つた訳ですから、念仏信仰者は、西方極樂往生を願つて南無阿彌陀仏と念仏を唱えている場合では無く、阿彌陀如来と同じ様に南無妙法蓮華經の信心修行をしなければいけないのであります。この時に16人の末っ子の釈尊の説法を聞き化導を受け、妙法蓮華經の法に縁した衆生達が、その衆生達には、個々に、この時の記憶と自覚が釈尊在世の時代には忘却されて、無くしているれども、三千塵点劫の時を経て、インド降誕の釈尊の、十大弟子の舍利弗や目連等々の名前でも弟子となるのであります。彼等は、この三千塵点劫の時点で彼等に下種されていたのであると明かされますが、本人達は分かりません。これを【迹化の菩薩】と称するのであります。

五百塵点劫の説明の前段として、三千塵点劫の説明をしましたが、妙法蓮華經の法華經は、

この三千塵点劫に於いても、釈尊は、妙法蓮華經を父であり仏である大通智勝仏から妙法蓮華經の法を承けられるという、妙法蓮華經主体の場面設定なのであります。つまり、妙法蓮華經に縁するという、妙法蓮華經との縁の大切さを示しているのであります。

この三千塵点劫は迹門で表わされ、本門に至って、五百塵点劫が法華經如来壽量品第十六（開結496p）に、

「我實に成仏してより已來、無量無辺百千萬億那由佗阿僧祇劫なり、譬えば、五百千萬億那由佗阿僧祇の三千大千世界を、仮使人有って、抹して微塵と為して（中略）一塵を一劫とせん、我成仏してより已來、復此に過ぎたること百千萬億那由佗阿僧祇劫なり、是れより來、我常に此の娑婆世界に在って説法教化す。」

と、五百塵点劫を説きます。この五百塵点劫は五百千万億那由佗阿僧祇劫を略して、五百塵点劫と表現していますので、三千塵点劫より遙かに遠い過去という事が分かります。此処を一般的に遙かに永遠とも思えるほど古い過去の為、古來から【久遠】と呼び称しているのであります。天台大師智顛は、「玄義」の中で、この壽量品の部分で「三妙」の解釈をします。

常在此娑婆世界説法教化（本国土妙）

我實成仏已來甚大久遠（本果妙）

我本行菩薩道所成壽命（本因妙）

との順序で配します。五百塵点劫には、大通智勝仏の様に存在や出現する仏は一切現われません。

いきなり、本果妙の仏として存在したかの様に説かれます。しかし、その直後に、固有の仏の存在は表現されないまま、「我本行菩薩道所成壽命」と示され、「玄義」に於いて、本因妙に配されます。つまり、五百塵点劫に成仏出来たのは、【私は今迄菩薩道を行じて来たから】と、示されるのであります。法華經の中で【菩薩道】と説かれれば、それは妙法蓮華經受持の【菩薩道】以外には無い訳であります。つまり、大通智勝仏の様な師となる仏の存在が無く、自解仏乘として、釈尊は五百塵点劫以前に妙法蓮華經の菩薩道を歩んだ結果仏と成り、その後、本化の菩薩と称する弟子を教化したのであります。つまり妙法蓮華經の法が源にあり、その妙法蓮華經の法を信心、修行した、修行者（菩薩）が、我が身の生命、森羅万象の生命を、妙法蓮華經の仏性と見出し、仏と成った、それが釈迦如来という順序になります。まず源に法がなければ、悟り、仏にはなれないのであります。五百塵点劫、本化の菩薩の上首である上行菩薩も、釈尊からの結要付属を承け、妙法蓮華經を、末法に伝える責任

と使命を持つのですが、末法へ釈尊像に向かって、「南無釈迦牟尼仏」とか「南無妙法蓮華經」と唱える信仰を伝えるので無く、当然、一念三千の妙法蓮華經の法を末法に伝える、妙法蓮華經の法が、釈尊よりも前に本然として有り、後に、人（仏）が現われる。元々法と人は別々の存在では無く、本然として一体であると悟る、その順序の中で、上行菩薩の存在と役目を理解しなければいけないのであります。上行菩薩が末法へ妙法蓮華經を伝えるという事は、妙法蓮華經だけを伝えるのではなく、妙法蓮華經に南無妙法蓮華經と唱え南無妙法蓮華經の生き方をする信仰を伝えるという事なのであります。南無妙法蓮華經但行礼拝の信仰を伝えるのであります。

この事から考えれば、【上行菩薩再誕日蓮】の自覚も、上行菩薩再誕が終点では無く、上行菩薩が末法に伝えた、妙法蓮華經信仰こそが、上行菩薩再誕の真意なのであります。つまり、【上行菩薩の再誕】の自覚は、龍ノ口法難、佐渡流罪に時間的に重なり、本尊初筆は龍ノ口法難直後の依智軟禁の折であります。

本尊は一切衆生平等成仏の法を、一切衆生に伝え、縁せしめる為、眼に見えない日蓮大聖人が悟られた一念三千の法を墨、筆、紙、に託して、強いて指し示し伝えなければいけない存在ですから、自らが上行菩薩の再誕の自覚を踏まえた上で、その上行菩薩再誕の立場で完結ではなく、再誕を越えて、人法一体の成仏した自覚、末法の本佛の自覚が無ければ、頭おかせないものであります。

因みに、釈尊像、阿弥陀如来像、大日如来像、等々の仏像本尊は、各宗各派の宗祖開祖自体に成仏の自覚が無くても、その仏菩薩を作る事が出来ます。それ等を信仰していない、もしくは何にでも手を合わせ拝み、注文によって、釈尊像、阿弥陀如来像、大日如来像、観音菩薩像、地藏菩薩像等々何でも造る、一途にそれだけの信仰者では無い仏師が彫った仏像でもかまいません。日蓮大聖人が、それまで本尊と拝していた、釈尊一体象と、その前に法華經の經卷を安置するという。爾前經を説いた釈尊で無く法華經を説いた釈尊を本尊とする考え方で事足りるならば、龍ノ口法難以後も臨終に至る迄、何の不充分さも感じず、龍ノ口法難以前と同じ本尊形態を維持されていたはずであります。しかし、釈尊一体像の本尊形態を越え、不十分とし、釈尊始め、全ての諸仏諸菩薩の悟った一法、一切森羅万象、三千大千世界のあらゆる存在の佛性を、妙法蓮華經の法と改めて自覚し悟り、その妙法蓮華經の法に南無する事が、成仏の直道であり、どれ程諸仏諸菩薩の像を本尊として信仰しても、その諸仏諸菩薩の悟った法が妙法蓮華經と自覚出来る者は皆無である。末法の荒凡夫には、一切衆生平等成仏の法を真っ直ぐに、誰でも分かる様に伝え、限られた人間の過酷な短い人生という

時間の中で、妙法蓮華經の仏性に目覚め、永遠常住の成仏をして貰いたい。その思いを持って、文字十界互具本尊が顕わされているのであります。一体仏本尊も、一尊四土本尊も、許容し勧められていたとの主張も有りますが、まず十界互具本尊を中心にして、初めてそれらが成り立つのであって、本尊は、どこまでも、「法華經の題目を以って本尊とすべし」が、日蓮大聖人の真意であり、釈尊本尊で無い事、釈尊は在世、正法時代、像法時代の本仏であって、末法では本仏では無いのであります。そして、多宝如来（妙法蓮華經の証明仏）、釈尊、十方分身の諸仏も、上行菩薩等四菩薩も、全て首題南無妙法蓮華經の御題目の脇士である事が、首題南無妙法蓮華經の御題目の両脇に二仏並座し、本化の代表脇師として書かれてある姿を拝すれば、真実の法、南無妙法蓮華經と脇師の關係が明らかに本尊の相に示されているのであります。

「観心本尊抄」（全254p）

「此の時地涌の千界出現して本門の釈尊【を】脇士と為す」

を、大石寺は【を】と読み、身延日蓮宗系は【の】と読むと、古くから不毛な議論をしています。【鶏が先か卵が先か】と同じであります。「観心本尊抄」は、白文で書かれてありますから、どちらの読み方でも正しい事になります。首題である妙法蓮華經の法が源である事を示す為、釈尊も上行菩薩も、南無妙法蓮華經の脇士なのであります。釈尊が主体か、上行菩薩が主体か、どちらが勝劣かの、二者間の問題ではないのであります。鶏と卵の二者が存在するには、要となる法があってこそ二者は成立し、二者共に尊く、そこには前後、勝劣無く、生命の循環が営まれているのであります。勿論、鶏と卵だけで成立しているのではなく、二者に関わる全ての生命も同様に尊く、勝劣無く、平等なのであります。どちらが勝るかという事は、意味の無い不毛の議論なのであります。

要となる妙法蓮華經の法が源に有り。釈迦、上行、多宝、全ての諸仏諸菩薩は、全て妙法蓮華經の脇士なのであります。つまり、「法前仏後」本然として存在する妙法蓮華經の法を中心として、仏、菩薩が、この妙法蓮華經の法を示す、舞台回しとして存在し振舞っている所以であります。

法師品第十（開結391p）「此の中には已に如来の全身有す。」（妙法蓮華經の法の中に、仏の全てが納まっています。全ての仏、菩薩の悟りの中味は妙法蓮華經であります。）

「日蓮が魂を墨に染めながして書いて候ぞ」の【日蓮が魂】【魂魄佐渡に渡りての魂魄も】は、日蓮の個人的な魂では無いのであります。勿論末法本仏、一切衆生平等成仏の導師の自覚の上、一切衆生との繋がりを自覚した上での【日蓮が魂】【魂魄佐渡に渡りて】なの

であります。一切衆生と遊離孤立しての利己的魂ではないという意味であります。全ての生命に具わる、日蓮が一切衆生に魁て悟った、妙法蓮華經の佛性という、魂であります。日蓮の個人限定の魂ならば、それは本尊に成り得る法にはならないのであります。加えて、この仏性は、個々の生命に十界互具として必ず具わる存在であると同時に、個々のAさんの仏性は立派だな、Bさんのは普通だな、Cさんのは大きいな、Dさんのは小さいなという、個々の所有物ではなく、法として平等に具わる、譬えて言えば、全ての生命の元素である五大は、元素である以上全ての生命に平等であります。空気や水は、森羅万象に存在する生命個々に呼吸され、給排されるけれども、全ての空気や水は繋がって平等に一つであり、一体なのであります。つまり、誰のものにもなり、誰のものでも無いのであります。【日蓮が魂】は、日蓮だけの魂ではない、全ての魂という事なのであります。それが妙法蓮華經であります。私達の魂も私達だけのものではなく、全ての魂なのであります。

「諫曉八幡抄」（全587p）

「涅槃經に云く「一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ如来一人の苦なり。」等云々。日蓮云く一切衆生の同一苦は悉く日蓮一人の苦と申すべし。」

日蓮の個人限定の魂を本尊に染めながしても、それは一切衆生平等成仏の法を本尊に顕した事にはならないのであります。【未曾有】も、本尊を顕わした事は、勿論未曾有ですが、本当の【未曾有】は、一念三千の法を末法の一切衆生に伝える為に顕わした事が、真の【未曾有】なのであります。墨、筆、紙に託して眼に見えない一念三千の法を強いて指し示して文字にした訳ですから、形は有るけれども最終形態の偶像崇拜では無い、偶像崇拜にしてはならないのであります。

もう一点、ここで加えさせて頂くと、富士門流歴代書写の本尊の首題は、全て、【南無妙法蓮華經 日蓮在御判】であります。私は、日興上人は、少なくとも伊豆伊東流罪から、日蓮大聖人に寄り添って生活し、常随給仕をされた方で、全く御書の中には、生活の事、日蓮大聖人の顔つき、体つき、日常のエピソードは全くと言っていいほど示されていません。あったけれども長い年月の中で無くなってしまったのか、貴重な紙に、信仰以外の事を示す事が不要と考えたのか、手紙の冒頭も、時候の挨拶も無く、直本題といった書き様であります。しかし、どう考えても伊豆伊東の流刑地、佐渡の流刑地に於いて、日蓮大聖人は、思索し、御手紙、論文を書く事を生活の中心とし、日興上人は、それを支える為に、炊事、洗濯、食材の調達、近隣の折伏。佐渡塚原三昧堂の状況を御書で拝する限り、住居として、死なない様に生活する為に、木切れを拾い、床、壁、屋根を修復し、大工仕事をし、藁を調達し、寝

る事が出来る様に、便所、炊事場を作って、調え毎日を送る為の食材の調達等々、日興上人が先頭に立って御苦勞された事は、当然想像出来ます。日蓮大聖人も当然、思索、御手紙、論文だけでなく、自分自身の生命に関わる事ですから、力を合わせてされたと思いますが、中心は日興上人等最初に日蓮大聖人と共に佐渡に御供した弟子であり、その中心となる日興上人で、或る意味、日興上人は伊豆伊東流刑、龍ノ口法難を目の当たりにし、佐渡流刑の当事者である日蓮大聖人と同じ苦しさ、もしくは、それ以上の過酷さを経験し一緒に受難した方なのであります。熱原法難も鎌倉の熱原農民が捕らえられている土牢を見る現場から体験をされ、日蓮大聖人へ報告されている訳であります。その意味からも、私は日蓮大聖人と同じ、人法一体の、法華經の行者として生き、仏としての自覚を持たれたと自認し、発言しても、何らおかしい事は無いと思います。しかし、その日興上人が、日蓮大聖人亡き後、本尊書写に当たって、【南無妙法蓮華經 日興】と書く事無く、【南無妙法蓮華經 日蓮在御判】と書かれ、日目上人から現代に至る迄、歴代は御本尊書写係の立場考え方、位置が守られているのであります。それは、末法の法華經の行者として生き、成仏する手本は、末法の本仏は、日蓮大聖人ただ一人であるという富士法門の表明なのであります。身延日蓮系の各宗各派の貫主が【南無妙法蓮華經 自分の名前】を書いて自己満足をしています。その時代の人事の妙で貫主になっただけで、日蓮大聖人と同等もしくは日蓮大聖人を越える法華經の行者は誰一人いないのであります。恥知らずこの上ない事だと思います。そして大石寺の貫主さんも池田大作さんも浅井昭衛さん等の今日蓮だと思ひ込み、その様に振る舞っている凡夫、それをヨイショして思ひ込んでいる凡夫。日蓮大聖人は、後にも先にも日蓮大聖人だけなんです。生まれ変わりも何も出て来るわけが無いんです。日興上人が、身を持って、本尊の姿として教え誠めてくれているのであります。つまり、日興を筆頭として、日蓮大聖人以外の人は、全て本尊書写の係、代理でしかないという化儀なのであります。

三千塵点劫の釈尊も、五百塵点劫の釈尊も、その源は、妙法蓮華經の法であるという事が良く分かります。そして上行菩薩に託されたものも、妙法蓮華經だけでなく、妙法蓮華經信仰であるという事が良く分かります。ですから上行菩薩は、法華經八品の妙法蓮華經の法だけに限り、宝塔と共に姿を消し、次に現われるのは、末法に妙法蓮華經信仰を伝える時だけという、妙法蓮華經信仰を伝える伝達者の責任と使命を果たす存在なのであります。ですから、上行菩薩には、まったく法華經の行者としての振舞、ドラマは、何故だろうと思う程、その役目は上行菩薩の役目ではありませんと断言している様に、絶無なのであります。しかし、絶無では、どうして法華經を信じ、行じ、学び、流布する「菩薩の道を行ずる」末法一

一切衆生の手本が無いという事になってしまうのであります。上行菩薩ばかりでなく、厳密に
いけば、A図右側に出てくる釈迦如来、多宝如来も、他の浄行菩薩、安立行菩薩、無辺行菩
薩、一切の地涌の菩薩も、法華経の行者としての振舞の手本は示していないのであります。

日蓮大聖人が【上行菩薩の再誕日蓮】とされたのは、上行菩薩という本化の菩薩を以って、
妙法蓮華経の法と五百塵点劫と釈尊と末法を繋ぎ成立させる存在人物は上行菩薩だけなので
あります。【上行菩薩の再誕】という最後のワンピースがはまらないと、法華経に示された
一切衆生平等成仏の妙法蓮華経の法を伝えるという内容は未完成放置となり、辻褄が合わず、
全ての構造が崩壊矛盾しゴミのようになってしまうのであります。本尊建立に至る迄の方程式
に【上行菩薩の再誕】は絶対必要条件になっているのであります。仏滅後2000年過ぎれば時
間経過としては、末法ですが、仏滅後2220年経過し、日蓮大聖人が上行菩薩の再誕の自覚を
踏まえ、末法の本仏、導師の自覚に立って本尊を顕すまでは、仏教は像法時代の条件のまま
で、末法へのスイッチの切り替えにはなっていなかったのであります。【上行菩薩の再誕】
によって、完全に末法に切り変わる条件が揃い、末法突入となり、釈尊は五百塵点劫、三千
塵点劫、在世には本仏であったけれども、末法では日蓮が末法の導師として本仏であり、末
法から見れば、釈尊は迹仏であるという、役割分担の切り替えと違いが明確になるのであり
ます。仏教各宗各派、身延日蓮系の宗派は、末法から一切經典を見るという事が出来ず。五
百塵点劫、三千塵点劫、在世、末法、全てごじゃませの時節の混乱の中で仏教を見るため、
妙法蓮華経の法が、一切衆生平等成仏の源の法であるという事、日蓮大聖人が末法の本仏で
あるという事も、熱原法難の法門的意義も、常不軽菩薩の跡を継ぐの意味も、理解不能な
のであります。

「日蓮無くば仏語は虚妄とならん」顕仏未来記（全507p）

一切衆生平等成仏の法である法華経は全て虚妄となってしまうからであります。つまり、
日蓮大聖人から見る時、この法華経の中で、五百塵点劫の時空を超えて、欠くべからざる、
日蓮と釈尊の関係、法華経の中の何処に日蓮の立ち位置があるのか、法華経に於ける日蓮の
責任、使命、役割等々が理路整然と定まらなければ、妙法蓮華経の法によって成仏を遂げ、
上行菩薩は末法へ妙法蓮華経信仰を伝えても、その振舞は示さないわけですから、日蓮が末
法無仏の国土に本佛導師として、一切衆生平等成仏の法を縁せしめる。この為に、【上行菩
薩の再誕日蓮】の自覚と、本尊建立を日蓮大聖人一人の第一段階とすると、未だ一切衆生平
等成仏の法の完成形には至っていません。第二段階として、出世の本懐としての確証を、弘
安二年十月一日「聖人御難事」に於ける

余は二十七年なり

の、熱原農民の受けた法難によって、龍ノ口法難に於ける、【上行菩薩の再誕】の、日蓮一人の人法一体の成仏の自覚では無く、仏法の根本目的である、師弟一箇して、日蓮と、人生も、修行も、学識も、生きる場所も、まったく違う初心の御信者さんが、名字即の凡夫として、全く日蓮と同じ妙法受持の志、どんなに冤罪の理不尽な扱いを受けても、貫こうと土牢に入牢され、日付から考え、まだ殺されていない時点、どうされるのか分からない不安に苛まれ怯えながら信心を貫いて成仏したいとの志を貫いている、十数人の農民の姿に、末法の名字即の信を師弟一箇して貫く人法一体の姿こそが全ての凡夫の成道の姿である。一切衆生平等成仏の確信確認を得、仏法の完成となり、出世の本懐、宗旨の建立を宣言されているのであります。法華経身読、龍ノ口法難、佐渡流罪、【上行菩薩の再誕日蓮】の自負自覚だけでは日蓮大聖人御一人の成仏であります。【常不軽菩薩の跡を継ぐ】自覚、熱原法難によって、出世の本懐がなされ、法華経の予言の全てが完成し、日蓮大聖人の末法一切衆生平等成仏の法門の完成となり、ここに仏法の完成、宗旨が明らかに建立されたのであります。

以前、一般の方に、日蓮大聖人法とはどういうものなのか概略を御話し、折伏した折に、熱原法難の御話しをしましたら、「殺された人数が、たった三人ですか。キリスト教弾圧の歴史は、何万人もの人が幕府に殺されているんですよ。」と、鼻先で嗤われた。何十万何百万殺されたという殺された人数を競っているのでは無く、『聖書』への信仰の為に殺されたのか、妙法蓮華経の法を貫く為に殺されたのか。法難の大きさ、殺された人数の多い少ないによって法難の意義が重んじられたり軽んじられたりするものでは無いのであります。日蓮大聖人は、法難で死んだ事を美化し賞賛するのではなく、妙法蓮華経の法の為、生きて生きて生き抜いて結果殺されてしまったという、貫く事の大切さを考えて貫きたいのであります。大石寺は、権力者から睨まれる事を恐れ、日蓮大聖人の【宗旨建立】にとって欠くべからざる重要な熱原法難を永く封印し見向きもしなかった、【熱原三烈士】顕彰碑は、大正10年4月15日聖誕700年を期して、57世日正上人の代であるにもかかわらず、隠尊56世日応上人の名前で建立されている。富国強兵の時代を反映してか、死を美化して烈士と表現し、碑文の内容も、熱原法難の概要をなぞってはいますが、弘安2年10月1日の宗旨建立には触れていません。この顕彰碑建立以後【熱原三烈士】と呼ぶ事が定着してしまっただけであります。私は、法難の状況内容からすれば、一番凄惨なものは、文永元年11月11日の小松原法難だと思います。日蓮大聖人自身も頭を切られ、腕を折り、弟子の鏡忍房、御信者の工藤吉隆が殉死した法難は、或る意味龍ノ口法難以上に絶命の可能性の高い、通り魔的残虐なものでありま

すが、日蓮大聖人は、この法難に信仰上の分岐点を感じる事無く、国王の難では無く東条景信の私怨と受け止め、御書の中でも重く受け止めていません。そしてこの法難でも死を美化していません。【烈士】は、法華経の行者として生きる事に、極めてふさわしくない表現で、日蓮大聖人の教えから外れるものだと思います。大石寺は、この弘安二年十月一日の【聖人御難事】の「余は二十七年なり」を以って、戒壇本尊が顕わされたと頑迷に主張していますが、戒壇本尊は弘安二年十月十二日書写という事になっています。十月一日は日蓮大聖人が熱原信徒と共に、師弟一箇して、眼に見えない一念三千の法を人法一体感得し、宗旨を建立した瞬間であります。本尊を顕わす以前に、法が悟られて無ければ、筆を持ち、筆を動かす事は出来ないのであります。一階の上に二階が有ると同じであり逆は無いのであります。此処に宗旨を完成させ建立しても、御本尊を顕わさなくても、何も問題は無く、御本尊を顕わさなければ、宗旨にならないという関係はないのであります。1日と12日、11日間の差違があります。にもかかわらず、「三烈士の絶命するまで御題目を唱え続けた最後の御題目が戒壇本尊の首題の御題目になった」などと、まるで、「講談師見て来た様な嘘を言う」の作り話が、まことしやかに語り継がれ、死を美化し、日蓮大聖人の信仰観をゆがめているのがあります。大石寺は、この11日間のズレを説明出来ますか？11日間日蓮大聖人の法はどこにあったと言うのでしょうか。この嘘も是正していかなければいけない重要な点であります。

建長五年四月二十八日を【宗旨建立】と思い込み、言い続けている僧俗がいますが、建長五年は日蓮大聖人の法華経の行者としての旅立の日であります。未だ、末法の本佛の自覚も無い、御本尊も顕わしていない時点を、【宗旨建立】と言い続ける人々は、日蓮大聖人の示された宗旨が何かも分からない、何処に有るかも分からないで信仰していると思込んでいる大愚者であります。そんな事も分からないで、何が【戒壇本尊絶対】なのでしょう。

【戒壇本尊絶対】の主張にも矛盾する事さえ分かっていないのがあります。戒壇本尊が宗旨として顕れる以前の建長五年四月二十八日に【宗旨建立】があつたら、言っている事に矛盾する事を、自分達で分かっていない、大石寺は恥晒しの宗派だという事になります。【宗旨建立】の機縁となる、一切衆生平等成仏の法に無くてはならない【熱原法難】であるにも関わらず、現在では、【戒壇本尊絶体】に欠かせない理由に利用している【熱原法難】を何故大石寺は無視してきたのでしょうか。政治権力に逆らわないで、大石寺という土地、伽藍と、

【戒壇本尊絶体】【血脈絶体】を維持する為には教義を変質させてでも、自分達が生き残る事が法を守る事、法を清浄に守っても、大石寺が無くなり、戒壇本尊が無くなれば、日蓮大聖人の法が無くなってしまふという本末転倒の考え方によって、政治権力には逆らわないと

いう骨の髄からそういう体質になっているのであります。明治政府の富国強兵政策、軍国教育にも、宗教者として、戦争の愚かさを説く事も無く、唯々諾々と従うだけでなく、翼賛的言動をし、果ては、「南無妙法蓮華經の信心を多くの国民がすれば、戦争に勝てる。」という、共存共栄の鼓舞までするようになるのであります。私が出家し、小僧時代の昭和30年40年代は、朝の起床を促す寮全体に流す音楽は【軍歌】がほとんどだった。軍国時代の深い反省など日常の生活の中には、語られることも無く、全く無かった。つまり、事なかれ主義、反権力にならず、常に親権力のスタンスで生きるという処世術なのであります。為政者に逆らった【熱原法難】を前面に出すことは、精神よりも形態を守ることに主眼を置く大石寺の長年に渡る姿勢からすると、不都合極まりない、戒壇本尊の為には、主張したいが、世の中が戦争に傾いて行く時代には迷惑千万の歴史的事実なのであります。

昭和19年1月10日俗名藤本秀之助、法名蓮城日護比丘55歳は長野刑務所服役中獄死。日蓮大聖人の法の上から「天皇も人間である。」との発言が官憲の耳に入り、不敬罪によって投獄。取り調べに名を借り、拷問極寒によって死に至ったと推測される。藤本蓮城師は、戦争反対を声高に唱える人間ではなかったと思います。しかし、全ての生命が凡夫であるという事を曲げないで貫いたという事は、逆証明として、天皇は神では無いという事を折らないで貫いたという事が分かります。この事は「富士年表」不記載であります。何故僧籍にあった者の存在を記さないのでしょうか？大石寺は、未だに戦争時代の反省をしていません。戦争反対も明確にせず、憲法第九条を守ろうも言いません。今日の時代が、戦争出来るような体制に傾いて行く、きな臭い時代になっているにもかかわらず、自由に主張発言が出来る時代になっているにもかかわらず、自己反省も不戦宣言もしません。どんな時代になっても、波風を立てない様に、言葉尻を捕らえられない様に、逃げ道を確保しておく為に、時代と世相が、そうであったから致し方が無かったと言い逃れられる様に、気を配っているのであります。「戦争反対」を言わない者を宗教者とは言えないのであります。「広宣流布」を訴え、「戦争反対」は訴えない。仏性の大切さは説くが、生命の大切さは説かない。そんな「広宣流布」ってあるんでしょうか。何が【針金宗】ですか？市販のペンチで簡単に自分でも他人からでも簡単に自由自在に切断出来るじゃないですか。【謗法厳戒】を言いながら、ただの【風見鶏宗】なのであります。

二番目に、【常不輕菩薩の跡を継ぐ】の自覚について論を進めたいと思います。

先ず、最初に申し上げた様に、日蓮大聖人は、何故【上行菩薩の再誕日蓮】だけでは駄目だったのでしょうか。逆に、何故【常不輕菩薩の跡を継ぐ】だけでは駄目だったのでしょうか。

か。何故【上行菩薩の再誕日蓮】 【常不輕菩薩の跡を継ぐ】の二要素を必要条件として示されたのでしょうか。そして、何故【上行菩薩】は【再誕】であり、【常不輕菩薩】は【跡を継ぐ】なのでしょうか。

【常不輕菩薩】の説明と合わせて【跡を継ぐ】の説明をしたいと思います。

【常不輕菩薩】

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十（開結568p）

得大勢、乃往古昔に、無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぎて仏有しき。威音王如来、応供、正偏知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、佛、世尊と名づけたてまつる。劫を離衰、と名づけ、国を大成と名づく。その威音王佛、彼の世の中に於いて、天人阿修羅の為に法を説きたもう。声聞を求むる者の為には、応ぜる四諦の法を説いて、生老病死を度し、涅槃を究竟せしめ、辟支仏を求むる者の為には応ぜる十二因縁の法を説き、諸の菩薩の為には、阿耨多羅三藐三菩提に因せて、応ぜる六波羅蜜の法を説いて、仏慧を究竟せしむ。得大勢、是の威音王仏の寿は、四十万億那由佗恒河沙劫なり。正法世に住せる劫数は一閻浮提の微塵の如く、像法世に住せる劫数は、四天下の微塵の如し。其の仏、衆生を饒益し已って、然して後に滅度したまいき。正法、像法、滅尽の後、此の国土に於いて、復仏出でたもうこと有りき。亦威音王如来、応供、正偏知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と号づけたてまつる。是の如く次第に二万億の仏有す。皆同じく一号なり。最初の威音王如来、既滅度したまいて、正法滅して、後像法の中に於いて、増上慢の比丘、大勢力有り。爾の時に一人の菩薩の比丘有り、常不輕と名づく。得大勢、何の因縁を以ってか常不輕と名づくる。是の比丘、凡そ見る所有る、若しは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を皆悉く礼拝讚歎して、是の言葉を作さく、

我深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏する事を得べしと。

而もこの比丘、専らに經典を読誦せずして但礼拝を行ず。乃至遠く四衆を見ても、亦復故に往いて礼拝讚歎して、是の言葉を作さく、

我敢えて汝等を輕しめず。汝等皆、当に作仏すべきが故にと。

※現代語意識※

私は、あなた方を深く尊敬します。

何の条件も無く、心の底から、あなた方が、どれ程私を輕んじて、私はあなた方を輕んじる、慢心を一切持っていません。

その理由は、あなた方も皆、菩薩の道（妙法蓮華經の法華經の行者として、信じ、修じ、学び、随力弘通する）を行ずれば、必ず、仏に成る（妙法蓮華經の仏）ことが出来る佛性（資質）が本然として具わっているからです。

【菩薩の道】

とは、二十四文字（妙法蓮華經）の行者として生きるという事であり。

【作仏すべし】

とは、十界互具の成仏、妙法蓮華經（二十四文字）の法華經の行者として生きる姿そのものが即妙法蓮華經の仏であるという意味であります。

【經典を読誦せずして但礼拝を行ず】

私達は、二十四文字は、常不輕菩薩品第二十の中の、經文と考え、その読誦を、常不輕菩薩は逢う人ごとに、手を合わせ読誦したと情景的に考えます。実際「是の言葉を作さく」と示されています。しかし、經文には、読誦では無い、但礼拝の行であると否定します。つまり、読誦して完結ではなく、縁する人の佛性を礼拝し、覚醒せしめる事こそが、常不輕菩薩の生き方であると示されているのであります。私達で言えば、南無妙法蓮華經の御題目を唱えるという事は、南無妙法蓮華經の生き方をするという事、南無妙法蓮華經を読誦しているのでなく、南無妙法蓮華經を、口、意、身、に行ずる事こそが唱題（但行礼拝）という事なのであります。

【二十四文字に込められている内容】

- 法華經の行者として生きるとはどういう事なのか。
- 法華經の行者として、成仏するとはどういう事なのか。末法の凡夫、名字即成道の手本。
- 下種とは。
- 流布折伏とは。
- 白法穩没の、末法という時代に於いて、成仏の道を明かした正法を説き、流布しようとするれば、必ず軽んじられ、罵られる。それを其罪畢已として、罪障消滅忍辱しなければいけない。それこそが末法の仏道修行。
- どんなに自分が軽んじられても、相手を邪宗、害毒、敵、邪教、相手の不幸を願ひ喜ぶ、罰に当たれ謗法者と、輕蔑し軽んじないで、どんな生命にも仏性が具わる事を認め、尊敬しなければいけない。人格の平等より深い、仏格の平等を忘失してはいけない。憎しみ、恨み、復讐をエネルギーにして生きるのではなく、全ての生命に仏の生命が具わる事に、感謝、報恩の心を持ち、それをエネルギーにして生きる常不輕菩薩は、そうして生きる事によって、

「其罪畢已」の罪障消滅が出来るのであります。

○相手が、どれ程悪行を積んでも、二十四文字（妙法蓮華經）の縁によって畢是在已の罪障消滅によって成仏出来る。

○言葉、文字だけで妙法蓮華經を伝える。暴力、暴言、権力を行使されても、法華經の行者は、使ってはいけない。

○菩薩の道とは、妙法蓮華經の法を身で読む。読誦ではなく、但行礼拜、法華經の行者として生きる事。

○どんな生命（森羅万象）も平等である。不信者、謗法の者も（行道不行道）佛性の具わる生命として認める。罪を憎んで人を憎まず。

○法華經を身で読むとは、どういう事か。

○我深く汝等を敬う（悉有仏性）敢えて敬慢せず<正因仏性>

汝等皆菩薩の道を行じて<縁因仏性>

正に作仏することを得べしと<了因仏性>

○折伏弘通とは、成果主義、組織拡大ではなく、いつでも、どこでも、誰にでも、何度でも妙法蓮華經に縁せしめる事。

法華經は、いつでも、どこでも、誰にでも、何度でも、強いて説き聞かすべしの、強折を主張します。しかし、創価学会は、その事の真意をわざと間違えたのか、誤った解釈をし、草創期、邪宗撲滅、謗法払い、折伏大行進を主張し、多人数で、夕飯時に何日も意地悪な持久戦の様に押し掛け、来て貰いたくない、普通の家庭生活が出来る様にと仕方なく入信した人、創価学会員自体が、日蓮大聖人の法が何かも学ばない、知らない内から、幹部の言われるがまま、真言亡国、律国賊、念仏無間、禅天魔の四箇の格言を伝家の宝刀の様に声高に言い続け、あんたの家は、真言宗だから長男が倒れ、後継ぎがないんだ、念仏宗は無間地獄に墮ちるぞ、禅宗は精神病になるぞ、邪宗魔人を打ち砕き、衆生の楽土築き行く、害毒、敵だ、信心すれば功德を貰えるが、しなければ罰が当たるぞ、騙されたと思って、三ヶ月だけやってみたらどうだ、結果が出なかったら、止めれば良いじゃないか、饅頭でも見ているだけじゃあ味が分からない、食ってみなきゃあ分からんでしょ。御本尊を持つてだけでも功德が有る。御本尊の両肩に、「有供養者福過十号」「若惱乱者頭破作七分」と書いてあると、現世利益と間違った解釈で、現世利益を前面に出し、中小の会社社長であれば、従業員に、信心しないと誅にするぞ、関連会社には取引しないぞ。等々と、正しい信心なんだから、脅そうが、嘘をつこうが良い、選挙に際し、他人になりすまし投票するという、犯罪を犯し

ても、創価学会内の中では英雄扱いされ褒めたたえられる、正しい信仰の為にするんだから、何をやっても良い、赦される、功德が有る。強折、強いて説き聞かすべきと説かれているじゃないかと、図々しさを生命力と言ひ、南無妙法蓮華經と言えば創価学会と思わせる様な社会を震撼とさせる程の勢いで社会現象までになりました。その結果、天理教、霊友会、成長の家、PL教等々あらゆる大小の新興宗教が戦後の荒廃と不安に取り入り、戦後の高度経済成長の発展を自宗の功德、御陰とすり替えて膨張して行きました。その新興宗教の中で、創価学会は群を抜いて急拡大して行ったのであります。それは、他の新興宗教が、一から教義、教祖のカリスマ性を社会に浸透させなければいけなかったけれども、創価学会は大石寺の教義と権威を看板に取り込み、最大限に換骨奪胎の利用をし、創価学会は新興宗教では無い、七百年の歴史、本山があると宣伝に努め、入会を躊躇う人の不安を払い、誤魔化して行ったのであります。しかし実体は、大石寺の信徒を名乗りながら、会員指導に大石寺僧侶は介入しない事、僧侶は冠婚葬祭だけをしておく事を主張し拒絶し、大石寺よりも速く別宗教法人を設立し、会員を増やし、組織を拡大する事に腐心し、日蓮大聖人の名前は利用するけども、創価学会に都合の良い教義解釈をし、会員を現世利益目的で鼓舞するという体質でやってきたのであります。創価学会の、折伏する為ならば何をしても赦され、功德が有るというのは、説明するまでも無く、日蓮大聖人の法を伝える折伏では無く、世間の法律からも外れるものであり、振り返って見れば、日蓮大聖人の名前と、正しい信仰をしたいと真面目に考える善良な人々の心を悪用した、単なる会員拡大、権力拡大運動だったのであります。今も、初代、牧口常三郎によって始まった、成仏目的の信仰など絵空事で分からん。「真・善・利」の真ならば利が有り、利有る事が善であるという理屈を立て、功德が有る罰が当たるの二者択一こそが日蓮大聖人の教えであるとの露骨な現世利益目的の体質が現代には適合しないとなると平和団体の看板を建前に見せ、新聞、テレビ、ラジオ等々を通して社会を騙しアピールしていますが、本音の体質は現在も染み付いた現世利益であり、公明党（創価学会）の政治内容がどうであろうが、与党として存在する為の集票運動に腐心し、創価学会内では法戦と称し、全国津々浦々の数え切れない座談会会場宅は、選挙前には俄かに選挙事務所にもなり、選挙の為の題目が唱えられ、投票所へ人々を車で連れ出し送り迎えする連絡事務所と化するのであります。そしてその事を指摘すれば、政教一致の何が悪いと開き直る。政治進出した時から今日までの行動は衆知の事実であり、創価学会は社会には、政教分離と嘘をつき続け、罪の意識は無く、選挙の為の御題目を唱え、得票数、当選者数を信心の現世利益のバロメーターとする行動は、今日も改める事無く、改める気持ちもなく、正しいと信じ、日蓮大聖人

の法よりも、創価学会の指導の方を最大一と思考する体質のままです。創価学会は、池田大作さんと阿部日顕さんの、どちらが偉いかという教義の支柱も互いに無い、無毛無能な覇権争いの結果、大石寺と別離しました。大石寺の権威に寄生しなくても、創価学会は独立しても、揺り籠から墓場まで十分にやっていると総合的に判断し、全国津々浦々から大石寺に登山し、一番効き目の強い本尊が戒壇の大御本尊で、戒壇本尊絶体、血脈相承絶対と大石寺と共に主張して来た道から降りて、池田大作さんを信仰の師と定めたわけではありません。特別な混乱もなく、冠婚葬祭は幹部導師の友人葬、戒名不要、結婚式、御授戒不要、御本尊自作、御経を方便品、壽量品の自我偈だけ5分程で終わる、朝夕勤行の御経を短く日蓮大聖人が読まれていたものを省欠しても何とも思わず、ローソクは電球、檜は造花で良し等々と次々に変えても、創価学会のいう事が正しい事だと異議無くついて行く。これらの変化に疑問、違和感を感じた人々は、純粋な信仰心だけでなく、日本仏教の風俗習慣、親族縁者の眼を考えて、本山大石寺、地方末寺、僧侶に付いておかなければ、正統から外れ、おかしいのではないかと考え、創価学会を脱会して、大石寺側の寺院へ所属替えしたけれども、創価学会に、大きな雪崩状態は起こらず、大石寺は肩透かしを食った。それ程、創価学会独自路線の洗脳は、長い年月の確信犯構想によって進められて来た事を改めて確認する事が出来たのであります。御互いの勧誘合戦は、折伏でも何でも無い、日蓮大聖人の法が中心の信仰では無く、御互いに組織の維持、拡大、保守、を一番に考えたシステムでしかないということなのであります。

創価学会といがみ合う、大石寺も同様に、組織と権威を守る事が、日蓮大聖人の法を守る事だと本末転倒し、戒壇本尊絶対、血脈相承絶対を主張するだけで、この二つの絶対を広宣流布する事が、日蓮大聖人の法であると頑迷に主張し、一切衆生平等成仏を中心に思考する姿勢は、皆無であります。中学生の時、高校生の時、大学生の時と、先輩に「絶対絶対と言いますが、何んで絶対なんですか。」と、何度も何度も尋ねました。「絶対だから絶対なんだ、日蓮正宗は信の宗旨だ、絶対と信じるんだ、頼道、頭でっかちになるな。」と殆んどの人に言われました。絶対を絶体説明出来ない絶体。それでは、盲信、邪信で、そんなものを広宣流布してどうするのでしょうか。戒壇本尊絶対なのに、身延離山を敢行した、日興上人、日目上人も、戒壇本尊には何も触れていません。京都の要法寺から九代、百年前後、釈迦本仏を主張実行する法主を招き入れた歴史が有りながら、何故「一器の水を一器に法水瀉瓶」なんですか？日寛上人の江戸時代は、法論、折伏の禁止の時代でありました。その為、各宗派はのびのびと我田引水の教義を展開していきます。批判されることが無いわけですから、

胡散臭い奇跡話が作られて行きます。胡散臭ければ胡散臭いほど、偉大であれば、そのくらいの事があってしかるべきであろうという荒唐無稽、道理常識無視否定の話が作られていきます。日寛上人は、要法寺から9代に渡り貫主を迎え釈尊本仏の教義に汚染させられた事を、目の当たりにし、十分知っているのです。にもかかわらず、戒壇本尊絶体、血脈絶体を主張するのであります。この日寛上人の江戸時代を背景にした時代の発言が現在の大石寺の理論になってしまっているのです。御肉牙も戒壇本尊も、この要法寺から貫主を招いた時代に忽然と出てくるのです。日寛上人でも、これを全否定する事は出来なかったのです。「当家三衣抄」の著述でも、要法寺から流入してきた、絵柄綾織りの袈裟衣に対して、皮肉な批判をされていますが、全否定、全廃止、全改革は出来なかったのです。「悪貨は良貨を駆逐する」間違った法門、化儀でも、名聞名利の煩惱に一度根を下ろし繁盛すると、着ると偉くなったような気分が既成事実となり、破折、改正はむつかしくなると、脱ぎ捨てれば簡単即座に『祖道の恢復』になるのに数百年出来ないのです。これと同列で、現在も「戒壇本尊絶体」「血脈絶体」に全面依存の大石寺になっているのです。何故絶体なんですか？絶対おかしいと言う絶対ではないですか？この点顕正会も、「国立戒壇」と言うか言わないかだけで、大石寺と長年小競り合いをしています。戒壇本尊絶対を世界流布しようという考えは、まったく同じであります。浅井さんも、今日蓮と振る舞い、会員に10分も15分も拍手させるという異常行動を異常とも思わずやらせていますから、倒れる前の、池田さんから始まるメロンの回し食いをさせ、忠誠心の点検をして有難がらせていた池田さんと同じで、常不軽菩薩の精神は微塵もないのです。そして、大石寺のやっている折伏強折も、顕正会も、創価学会と同じ只の凶々しい我田引水、覇権主義を広宣流布と言う、信徒数拡大、現世利益目的の権威信仰なのであります。

小僧の時から、「戒壇本尊絶対」と「血脈絶対」の、この二つが有れば、日蓮正宗は未来永劫安泰である。と教えられ、目上の先輩は絶対に正しい、後輩に間違いや失敗が有ると、「愛のムチだ、おまえの事を思って殴っているんだ」と、ビンタが飛び、問題発生 of 犯人が分からなければ、連体責任で一時間二時間と固く冷え切った鉄筋コンクリートの廊下に正座させられ、仕上げは全員ビンタ。毎日毎日ビンタされない様にと思い乍生活しました。ビンタされて育った後輩が先輩になり、ビンタを後輩にするのが当たり前の組織が出来上がって行きます。かばえば火に油を注ぐ為、誰もが皆見て見ぬ振りをし、心を閉じて過ぎ去る事を待ち、自分で無かった事にホットします。私は、随分殴られ、その度に、その理不尽さに心が冷えて行く自分を感じ、私は後輩を殴らない人間になろうと思った、しかし生涯一人だけ、

大学時代在勤していた寺院で、余りにも役目を果たさない後輩がいて、一回だけ、その人間の骨が砕け、暴行罪で犯罪者になってもかまわまないと思う程の怒りで殴った事があります。名前も、その時の情景も今でも、自分の心の傷として残っています。その瞬間、「人を殴る時、愛のムチなんか無い、単なる怒り、地獄、餓鬼、畜生、修羅の心しか無い。自分が地獄、餓鬼、畜生に堕ちて行くのを感じました。大学を卒業して、所化最後の修行で、一年の本山在勤をした時、小さい後輩の小僧を殴れる程の人間になっていない。何故、あの人達は、大学を卒業したばかりの未熟な人格形成で、いとも簡単に欲求不満のはけ口、酒乱で毎日毎日小僧を殴る事が出来たのだろうか、やっぱり何か根本的に狂っているんだなど、はっきり分かりました。暴力が当たり前の組織では、批判や自分の意見や創造性を発揮する芽は摘まれ、逆にそれを赦さない、軍隊と同じ、上の言う事が正しく、皆と同じが正しいという同調圧力と忖度に満ち満ちた、組織を守り、上の者の責任を下の者がかぶって詰め腹を切らされると言う事が当然のピラミッド型上意下達集団が暗黙の了解で出来上がっているのです。昭和52年創価学会が池田大作本佛を主張する様になり、全国に正信覚醒運動が起こった。その時、私は自分の考えを持たない様に育てられた僧侶が、良くまあこれだけ立ち上がったものだと言ったと同時に、阿部さんが、日蓮上人亡き後、貫主を篡奪し方向転換した時点で、多くの僧侶が堕ちて行った時にも、そうだろうなど、納得が出来た。個人的に話し合っても、「師匠が止めとけと言うから」「先輩が止めとけと言うから」「ニセモノだとしても猥下が言う以上は」だけで、信仰上こう考えるという人間は一人もいなかった。

「戒壇本尊絶対」と「血脈絶対」さえ言っていれば良いわけですから、日蓮大聖人の法を探究する疑問、努力、志は持たない方が良い、逆に隠蔽体質が正統で当たり前、探究し矛盾に気付けば、二つの絶体は、即座に破綻してしまうのであります。「研究論文」でさえ、最後の結びの言葉に「御法主上人猥下の心に添う研鑽精進をして行く所存であります。」という様な慣用句を誰もが付けなければいけない様な集団なのであり、それを貫主は、その場で至極当然の如く聞いているのであります。貫主絶対、現代の日蓮大聖人と祭り上げて置けば、貫主に任命された末寺の住職も、地方の貫主という権威を持ち、「私に逆らう者は、私を任命した貫主に逆らう事になる」と、中味の人間性は空っぽなだけに権威だけを振り回す僧侶が横行して行くのであります。貫主を今日蓮にしておくことは、とても便利な事なのであります。不思議な事は、皆んな今日蓮を主張しますが、今日興上人、今日目上人を名乗る人はいません。大石寺では昔から「広宣流布の暁には日目の再来が現われる」という言い伝えられていますので。日目上人の存在は非常に重要視されています。にもかかわらず、広宣流布

前に、貫主が今日蓮を名乗る。順序が狂っているのではないのでしょうか。

これ等の事から、創価学会も大石寺も顕正会も、日蓮大聖人の御書を通じて、【常不輕菩薩】の事を解釈講義をしています。全く自分達の現実を自省する事も無いのであります。

現代の日蓮大聖人と自他共に思い込んでいる訳ですから、法解釈の決定権を唯我一人持ち、人事権を持って、身内を都会の寺院の住職にし、逆らう者を田舎の住職にするという事を自由にすれば、誰でも世間の独裁者、傲慢会社社長と同様、傍若無人、「天皇」「生き神」「生き仏」「絶対者」と呼ばれる存在になり、意見者を斥け、提灯持ちだけを回りに置き、豚もおだてりや木に登る状態に本人自身もそう思い込み、そう振る舞う様になって行く、池田大作さんがそうであるように、歴代貫主もそうなる行く、そして最後は、どっちの方が偉いかという、餓鬼の喧嘩の上での分裂なのであります。

ここには、常不輕菩薩の精神も何も無い、一人の絶対者を自称する者がいれば、一切衆生の絶体平等と自由は否定される。貫主一人が生き仏、今日蓮を主張するならば、一切衆生悉有仏性は言葉だけになり、釈尊と同じ、完全無欠の本果斷惑の究竟即世界を目指し、凡夫なのに仏の振りをする有作信仰になります。日蓮大聖人の法は、凡夫は凡夫のまま、仏の振りをしないで、法華經の行者として妙法蓮華經の法を信じて生きる姿が仏であるという名字即の無作信仰であります。上の言う事は常に正しく絶体である。となれば、下の者は常に間違いという事になる。荒唐無稽の權威を確立し、それを絶体とし守ろうとする。日蓮大聖人は、眼に見えない一切衆生平等成仏の法、一念三千を一切の凡夫に伝える為に可視化出来る本尊を顕しました。その本尊を生命を写す鏡として、その本尊の奥に具わる本体である自分の生命の根本に一念三千の法、仏性を見出す。鏡に写っている本体は、自分であります。あなたの生命の中心に南無妙法蓮華經の仏の生命が具わっているんですよ。と、映し出してくれているのが本尊の姿であります。本尊は自分の胸中を写しているのであります。

「妙法蓮華經と唱へ持つと云ふとも、若し己心の外に法ありと思わば全く妙法にあらず羸法なり」一生成仏抄（全383p）

つまり愚像崇拜するために本尊を顕したのではないのであります。しかし、多くの信仰者は物体の本尊止まりの偶像崇拜に墮してしまっていて、本尊が私達に何を伝える為に顕わされたのかを見失っています。その代表が大石寺であります。戒壇本尊に日蓮大聖人の法の全てが込められている、戒壇本尊が灰燼に帰せば、日蓮大聖人の法は無くなる。じゃあ戒壇本尊に日蓮大聖人の法の全てが納まっているというならば、戒壇本尊が顕わされる以前は、法は何処にあったんですか？日蓮大聖人が産まれて来る前、法は何処にあったんですか？戒壇本尊

が顕わされた後の日蓮大聖人は、戒壇本尊に全てが移ったので、弘安五年十月十三日迄の期間は、日蓮大聖人は生きていても、もぬけの殻だったという先輩がいました。全ての存在が、成住壊空の道理の中で崩壊しても戒壇本尊だけは崩壊しない、戒壇本尊こそが日蓮大聖人の法そのものである、物体の戒壇本尊が永遠常住である、戒壇本尊だけには、成住は有っても壊空は無い。地球もいずれは壊空する運命の中にあります。そうすると戒壇本尊は他の惑星に避難させという苦しまぎれの論で、だまし、乗り越えて行きますか？戒壇本尊が一番で、末寺の本尊が二番で、御信者の家庭の本尊が三番。戒壇の本尊が体で、後の本尊は散影である。こんなバカな法があるだろうか。森羅万象の生命を支えている水が、この水が一番で、あそこの水が二番で、あっちの水が三番。この水が体で、あとの水は散影だという水が有るだろうか。一切衆生平等成仏の法、一閻浮提総与の本尊と言いながら、差別区別が有るのだろうか、小学生でも分かるバカ話で権威付けをしている、とんだ裸の王様は、未だ裸である事も忘れて、戒壇絶体、血脈絶対にしがみ付いて、一切衆生平等成仏の法を見ようともしていないのであります。素朴で基本的な疑問に答えられないようなものは、世の中にあってはならない愚法なのであります。

池田大作さんも、12年も病気で人前に出る事が出来無いにもにもかかわらず、創価学会員は元気だ元気だと噂を流して、「新人間革命」連載は、毎日「聖教新聞」に掲載されいと、明らかにゴーストライターがいるとの証拠の小説に喜び、信じたい会員は信じているのであります。草創期から現世利益中心に、「謗法の者は罰が当たって、病気になって苦しむんだ。」と、世の中に言って来た中心者が、現在寝たきりになっている事が露見すれば、内外共に、じゃあ池田大作は謗法の者なんですねと晒し者になるから、正直者になれない不自由な権威主義の、もうメロンの回し食いも出来ない、これまた裸の王様なのであります。

徳洲会の徳田虎雄さんでさえ、ALS発症の姿をマスコミに晒しても自分の意見を、あいうえお表に視線を合わせる事で、コミュニケーション出来る方法で発信しています。池田大作さんにしか出来ない発信は、「私は過去世にも現世にも謗法を犯したので、こういう身体になりました。」と言うか、「私が今迄言って来た事は間違っていました。日蓮大聖人の法は、過去世の宿業で、病気になるという様な法ではありません。私は間違っていました。創価学会員は全員考え方を改めて下さい。広く社会の人々に御詫び申し上げます。」と、訂正する為に12年の時間が与えられて来たのではないかと思います。

この様に、どちらの団体にも常不軽菩薩の法は邪魔であり、解釈しても、理解出来ない、実行出来ないから、否定しなければいけない危険思想なのであります。共産主義を名乗る国

の元首が独裁者として君臨し、民主主義は我が国に合わない、民主主義は世界を滅ぼすと主張しているのと同じであります。つまり、宗教団体では無く、覇権主義権力団体なのであります。こんな考え方を広宣流布として目指し、世界中に弘めたら、現代よりも、もっともっと混乱した、暗黒世界になる事は必定であります。

二十四文字は、何を言わんとしているのかの説明から、随分離れた様に思われるかもしれませんが、要するに、常不行菩薩の生き方は、権力欲、権威主義、覇権主義、名聞名利を否定した真逆に、法華経の行者はこうあれという振る舞いを示されているのであります。

【強折】とは、常不軽菩薩の行、いつでも、どこでも、誰にでも、何度でも信徒会員増員の成果目的では無く、法を説き伝え、縁せしめ、どんな迫害にも離れ避け逃げ、耐え、忍び、又諦める事無く何度でも繰り返し繰り返し伝え、妙法蓮華経の法に縁せしめる事をいうのであります。

これだけの事が、たった二十四文字に凝縮して余すところなく生き生きと表現されています。片や、上行菩薩には、末法へ法を伝承するというだけで、まったく法華経の行者としての人格、信行の振舞は示されていない以上、伺い知ることは不可能です。故に、日蓮大聖人が御書中に、「法華経の行者日蓮」「法華経の行者」と表現される時、それは【上行菩薩の再誕】では無く【常不軽菩薩の跡を継ぐ】を指し示しているのであります

日妙聖人御書（全1217p）

文永9年（1272）5月25日 聖寿51歳

日本第一の法華経の行者の女人なり、故に名を一つつけたてまつりて不軽菩薩の義になぞらえん、日妙聖人等云々。

妙法比丘尼御前御返事（全1419p）

弘安四年（1281）聖寿60歳

法門の故に人にもあだまられさせ給ふ女人、さながら不軽菩薩の如し

つまり、日蓮大聖人だけが【常不軽菩薩の跡を継ぐ】ので無く、熱原信徒もしかり、末法の一切衆生一人一人が、法華経の行者として、【常不軽菩薩の跡を継ぐ】事が末法の成仏の姿なのであります。

【逆縁の方軌】過去世、威音王佛の滅後、像法時代の末に（釈尊滅後より二千年後の釈尊主体の【末法】では無く、威音王如来所持の二十四文字<正法>の滅亡期となる【末法】の事で、同じ【末法】という表現ですが、時系列の次元が違いますので混同錯覚が無い様に理解してください。）経典読誦から離れ、二十四文字を唱え礼拝行をした。その功德によって六

根清浄し成仏をした。

順縁の信心とは、日蓮大聖人の法を素直に信じて、御授戒を受け入信し、御本尊様を受け安置し、朝夕の勤行をし、信行学折伏を心掛ける信仰者。

逆縁の信心とは、日蓮大聖人の法を信じる事が出来ず、逆らい反対する不信者。順縁広布とは、世界中が順縁の信仰者になる事。と、言われ、そう信じ理解している人がほとんどだと思えます。

【広宣流布】とは、順縁広布、世界広布、虱潰し、を指して進む事だと教え込まれて来ました。その為に、御授戒を受けさせ、御本尊を渡せば、それで日蓮大聖人の法が流布した、世界広布が進んだ、その為には、何をやっても赦され、功德が有ると考え、指導し、実行していったのであります。

日蓮大聖人の法とは、当然そういうものではありません。瞬間瞬間にコロコロと心変わりする【十界互具】を根幹の法とするならば、この世の中に信じたら絶体に後戻りせず迷わないという心の順縁固定の衆生など一人もいないのであります。森羅万象の生命全ては逆縁であります。現在順縁に信仰している人でも、瞬間瞬間の心には、疑いも迷いも懈怠も持っているのであります。何十年と信仰して来て、人生の最後に退転する人もいます。痴呆によって、入信以前の信仰に心が戻ってしまった人もいました。世界を見れば、何百年と続く、法華経以外の宗教建築、宗教行事、宗教文化、宗教教育、宗教価値観等々これ等を破壊制圧覇権して行く事が広宣流布だと考えるのが、順縁広布の目指す姿になります。もし、それを力で実行すれば、そこには必ず怨念、憎悪、殺人、戦争が産まれます。つまり順縁広布は出来ないのであります。

私は、自分が40歳になった時、「論語」の、「四十にして惑わず」は嘘だなと感じました。孔子は嘘つきで、迷わない振りをしていたんだらうなと思えました。大根一本買う時にも、鬆が入っていないか、どっちが美味しか迷うのに、孔子ほどの人ならば、そうだっただらうでなく、みんな同じ人間なのであります。迷わないで生きられる人はいない、孔子も十界互具の凡夫なのであります。釈尊が産まれて即座に歩き、「天上天下唯我独尊」と言った。釈尊程の御方ならば、その位な事はあるだらう。有難い有難いは、本当に有難いホラ話なのであります。大石寺の【御肉牙】も、道理から外れた荒唐無稽なホラ話なのであります。日蓮大聖人の抜けた虫歯に着いた肉が、広宣流布に向かって増殖し、広宣流布の暁には歯全体を肉が覆う。胡散臭い話ほど有難がる迷信主流の時代があったことは分かりますが、そんなものは、私達の一切衆生平等成仏の手本にはならないのであります。もう不幸な恥ずかしい財

産として、廃棄処分しなければ、世界中の嗤い物になるだけであります。

逆縁広布は、【十界互具】の生命を肯定し、いつでも、どこでも、誰にでも、何度でも、妙法を伝え縁せしめ、その人自身が今迄信じてきた法の矛盾に目覚め、自ら信仰する事を何百年でも待つ事、今信仰している人の心の中も基本的に全て逆縁なのであります。逆縁広布ならば信仰者の精進によって、世界広布は実現出来るのであります。又、しなければいけないのであります。森羅万象全ての生命に過去の生命にも未来の生命にも妙法の縁を結ぶ事が出来るのであります。成仏出来ない他宗の法を成仏出来ると思ひ込み信仰している人々と共生し寄り添いながら、何度も何度も話し合いながら、色々なしがらみを断ち切ることが出来ず入信出来ない人にも、妙法に縁せしめる事が出来るのであります。絶対に傲慢に否定や暴力と強制、強要、殺人、戦争、破壊で独善と覇権主義に陥ってはならないのであります。日蓮大聖人の一切衆生平等成仏の法が完璧でも、信仰している我々凡夫は、どこまでも十界互具の荒凡夫に過ぎないからであります。釈尊在世、正法時代、像法時代は、順縁広布が出来たとか、有徳王、覚徳王の時代には力を持って信仰させ順縁広布を実現させることが出来た。という説も有りますが、それは飽く迄も方便の教えの中での話しであります。どの時代であろうが暴力や国家権力で、本当に心からの信仰心は産まれなばかりか、それがどんなに正しい法であっても先祖代々に渡る憎しみと怨念を産み、さらに妙法に問答無用のアレルギーを感じ離れていく衆生が産まれるだけなのであります。創価学会がやった事を思い出せば良く分かる事であります。団体権力、国家権力で信仰を強制し、その国の国民全員を形の上で信仰をさせたとしても、心の中まで強制出来ないのであります。権力者が交代すれば、全てが瓦解する、その権力者の時だけの一過性で力づくで作られた状況を広宣流布等と言えない、権力者の自己満足でしかないのであります。それが妙法蓮華経であっても、それは心底からの信ある流布ではないのであります。圧力が働く流布は流布ではないのであります。どこまでも、その人が信じたいと、成仏出来る真実の法を求め、信じなければ、伝わった。流布した。にはならないのであります。つまり【国立戒壇】は、どこまでも順縁世界の方便の世界ですから、不可能であります。コロコロと心変わりする凡夫の十界互具を根本とすれば【国立戒壇】は不可能な方便の目的設定であります。信心修行は、一人一人がするもので、国家がするものではないのであります。

釈尊在世や、三千塵点劫、五百塵点劫には一つの迷いもない断惑の完璧な仏がいたと説く人がいますが、そんな事は机上の空理空論であって、方便であり、現実の十界互具の生命に即しない嘘であります。どんな時代であっても、全ては十界互具の生命なのであります。迷

心、悪心は洗っても洗っても出て来る垢の様に止める事は出来ないのであります。この世の中に存在する全ての生命、仏も菩薩、釈尊、上行菩薩、常不輕菩薩、阿弥陀如来、大日如来、薬師如来等々全てが十界互具なのであります。十界互具でない存在は無いのであります。逆に、100%仏界だけの存在、100%地獄界だけの存在もないのであります。絶対に創価学会や大石寺や顕正会の様に、十界互具の凡夫なのに、その人の過去世未来世の全てを知り尽くしているかの様に相手を見下げてはならないのであります。産まれ付きの身体障害、産まれてからの病気や事故での身体障害者、人種による肌の色、治療不可能な病気、短命等々を、過去世の謗法の罪だから、そういう姿、苦しみに産まれて来たんだと、これまた、同じ凡夫が、凡夫でない様な過去へ行って見て来た様な事を、上から目線で断言をする。肌が黒いのは謗法のせいでは有りません。先祖代々陽射しの強い地域に生活するには、寒い地域に先祖代々住む白人と違って、メラニン色素が活発に命を守る為に皮膚に蓄えられ、黒い肌になったのであります。何百年もの時間を掛けた進化なのであります。キリスト教が奴隷として扱う事を認めた為に、人種差別が公然と拡がって行ったのであります。人間の傲慢な愚かさであって、過去世の謗法の罪でも何でもないのであります。白いサギよりも黒いカラスは過去世の罪が有るとか、爾前の経々に関する日蓮大聖人御書を引用して、人々を差別する事を正当とする人がいます。

法華経本門の『普賢菩薩勸発品第二十八』開結（672p）には、

是の經典を受持せん者を見て、其の過惡を出さん。若しは実にもあれ、若しは不実にもあれ、此の人は現世に、白癩の病を得ん。若し之を輕笑すること有らん者は、当に世世に、牙破疎き欠け、醜唇平鼻、手脚繚戻すし、眼目角睐、身体臭穢にして、惡瘡膿血、水腹短氣、諸の惡重病あるべし

とありますが、これは低級な方便、誘引の法であり、これを盾にして、振り回すのは、法華経の真意から外れる間違いであります。これらは全て見てくれの異形病であります。人間は見てくれだけで差別し、いじめます。異形病の人よりも、差別し、いじめる人間の心の方が醜く歪んでいます。じゃあ3000年の昔、釈尊も知らなかった、肺癌、胃癌、大腸癌、人工透析、緑内障、交通事故による身体障害、交通事故死、糖尿病、脳梗塞、心筋梗塞、鬱病。痛風、水虫、鬱病、ひきこもり、孤独死、ホームレス、動脈瘤破裂等々は何の罪、因果の現われですか？言える人がいますか？

法華経の真髓の教えは、即身成仏であり、因果応報、輪廻転生の成仏は方便であります。身分差別肯定、障害、病者宿業、罪障消滅の物差しが中心では無く、妙法蓮華経の仏性に目

覚めているかいなか、

「彼の天台の座主よりも、南無妙法蓮華經と唱ふる癩人とはなるべし」（全260p）

という教えなのであります。どんなに身体が不自由な変形を持って産まれて来ても、どんなに肌の色で差別される人種に産まれて来ても、たとえ短命でも、『普賢菩薩勸発品』に挙げられる病気になろうとも、南無妙法蓮華經の一切衆生平等成仏の法に出会い、だれもが平等に成仏する事が出来る法を信じ、修行する事が出来、産まれて来て良かった、生きて来て良かった、産んでくれてありがとう、育ててくれてありがとうと、感謝報恩の心をエネルギーにして生きる、歓喜の中の大歓喜を誰もが得られるのが日蓮大聖人の法であります。過去の罪障があると卑屈になり、罪人の様に訳も分からず反省し、毎日毎日、あなたは罪障消滅の御詫びの御題目を唱えて生きろ謗法者。産まれて来なければよかった、産んでくれなければよかったと、自分を否定し、速く死に生まれ変わる事を望み、産み育ててくれた人を憎み、恨み、そんな卑屈な原罪意識のキリスト教の様な教えでは無いのであります。下らない罪業意識で、罪人として生きろと石を投げつけられる事が日蓮大聖人の罪障消滅の法なのか？釈尊はインド人で色が黒かったんですよ。過去世の謗法者だからですか？三世は今に有る。今どういう志で信仰するか、常不輕菩薩の跡を継ぎ、互いに生命の根本に具わる仏性を尊敬し合って生きなければいけないのであります。いい加減下らない、世の中の全員が正真正銘のただの逆縁の凡夫であるにも関わらず凡夫が分かったような裁判官になったつもりで、同じ法華經の行者を上から目線で裁くような、見下す様な、増上慢な信仰姿勢は反省し、それは法華經の行者の絶対にしてはならない事なのであります。そんな方便の教えを振り回し乍、人を見下し、脅しあげる。何故【即身成仏】と言えるのですか？その真逆の矛盾をどう説明するのですか？説明出来るならして見て下さい。自分でも分かっていない、その場しのぎ的使い分けは仏法の混乱を起こすだけですから止めるべきあります。

【威音王仏】威音王仏と称する同姓同名の仏が二億人いたという表現は、二十四文字（妙法蓮華經）の法を悟り、成仏を遂げた仏全てが、同名の威音王仏と称していたという状態を表現しているという事になります。例えば、日本人全員が、田中姓であったならば、社会生活に支障をきたします。いくら下の名前が違っていても不便で仕方が無いという事になります。しかし、威音王如来という同一名を名乗る二億人の仏は、二十四文字（妙法蓮華經）但行礼拝（法華經の行者）を行い成仏を遂げたという証である。という事ならば理解出来ます。他にも普妙如来は1200人、宝相如来は2000人という同一名表現が法華經の中に有りますが、人数が余りにもとびぬけている事と、ほとんどの經典では、一人一人仏の名前は別々が常識な

ので、極めて特異な表現であります。

【楞嚴經五】跋陀婆羅。並其同同伴の十六開士即座従り起。禮仏足を頂き而も仏白く。我等先ず於いて威音王仏法を開いて出家浴僧の時に於いて例に随い室に入る。忽ち水因を悟る。

【禪祿】 威音王仏の名を假て時の極遠を示し、又向上の本文を指して威音仏以前となす。

※三千塵点劫、五百塵点劫と数値を一切示さず競わず

【乃往古昔に無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぎて仏有しき】

【通釈】数える事の出来ない広大で無量の考える事の出来ない永遠の過去が、【威音王仏】の存在した時代だと、常不輕菩薩品第二十の冒頭に示されます。言及した解釈書が無いので詳細に検証する事は出来ませんが、明らかに三千塵点劫とか五百塵点劫とか数値の古さの競い合う愚かさの中に真実が有るのではないというアンチテーゼであり、法華経の中に説かれてい乍ら、釈尊を中心にした三千塵点劫、五百塵点劫の時空構成を超越した【二十四文字（妙法蓮華経）信の世界】を表現している。この次元の違い、コロンブスの卵、コペルニクスの転回の様な発想の転換が今迄最重要視され研究検証されていないという事が不思議であります。三千、五百の数値を上げればそれは、どれだけ遙かでも有限であります。五百塵点劫を久遠と一般的に言っていますが、久遠は無限永遠の事であり、五百と数値を示した時点で有限ですから、久遠というのは間違っています。永遠の過去(久遠)永遠の未来(末法萬年)どちらへもこそが永遠、無量無辺であります。人類が知り得る歴史の始まりのビッグバンより永遠の前から、永遠無限より妙法蓮華経の法は有り。永遠無限の未来、末法萬年、妙法蓮華経の法は人類の有無、宇宙の有無に関わらず有るのであります。

この【乃往古昔に無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぎて仏有しき】こそが数値を越えた久遠であり、永遠の中に一切衆生平等成仏の法、二十四文字、妙法蓮華経が本然として存在し貫かれている。という事が本当の久遠なのであります。

【法華通義六】此の空劫の初め成る仏なり。威音王仏已前に仏無し。

極遠の仏。この仏の前に仏無し。最古の仏との表現。

※この表現からすると、当然五百塵点劫よりも古く、釈尊もいなかった事になります。威音王仏以前に仏無しで、釈尊は存在したでは、論理が成り立たないのであります。当然日蓮大聖人もいなかったのであります。いる必要が無いのであります。

【其罪畢已】（そのつみおえおわって）

常不輕菩薩自身も過去世の二十四文字（妙法蓮華経）への謗法罪障を二十四文字流布礼拝行の功德によって罪障消滅して成仏を遂げる。仏と衆生、双方共、どんな生命も、どんな生

命も総て罪障を持つ凡夫なのであります。この世には、十界互具の凡夫しかいない。仏も十界互具の仏なのであります。

【みすぼらしい】但行礼拝中心の生活、基本的衣食住、富貴を望まない、他人からの讃歎尊敬を求めない、うぬぼれない、自分を立派に見せよう、大きく見せようとしないので、姿は乞食の様にみすぼらしい。四衆は誰も常不軽菩薩のプロフィールを知らない。誰かに記別、認可されて仏になるのでなく、菩薩の道を行ずる事によって、仏と成る。頂上に立つことではなく、その道のりで努力している生き方こそが成仏なのであります。

【畢是在已】（このつみおえおわって）

常不軽菩薩に迫害を加えた四衆は、常不軽菩薩でなく、二十四文字（妙法蓮華經）法に対する逆縁の謗法の罪によって地獄に墮ち、罪障消滅し成仏を遂げる。常不軽菩薩と四衆、双方共、どんな生命も、総て罪障を持つ凡夫であります。この世には、十界互具の凡夫しかいない。総ての仏も十界互具の凡夫なのであります。四衆は威音王仏の説く法とは、まったく違う法の信行者達であります。権威主義上昇志向の信仰観、自分より上位の者に評価され、成仏の記別、認可を貰いたい、讃歎されたい。成仏する者は選ばれし者で、見るからに立派で神々しく、立派な衣食住でなければならないという思考の為、常不軽菩薩の但行礼拝が軽蔑と感じ、怒りとなる。釈迦仏教と同じ思考回路。B図左の世界に住しながら、心はB図右に住する。上下、差別、階級、過程は修行で、頂上が成仏。常不軽菩薩と信仰観、目的観、価値観が真反対である事を表現。末法では、この思考で生きる事だけでも迷いであり罪障となるのであります。。

【読誦否定、但行礼拝】前の項目の説明と重複しますが、重要な点ですので、重ねて申し上げます。

何故、常不軽菩薩品第二十には、

「而もこの比丘、専らに經典を読誦せずして但礼拝を行ず。」

と示されるのでしょうか。

私達は、毎日朝夕読経する時に、法華經信仰者として、法華經方便品第二（世雄偈<唯一佛乘>まで）と壽量品第十六を読誦します。信仰者の基本修行として毎日朝夕読誦します。常不軽菩薩は、出会う人ごとに、同じ二十四文字の御経を相手に向かい手を合わせて唱えます。その姿は、同じ御文の御経ですから明らかに読誦に思えます。しかし、

読誦せず

但礼拝を行ず

と読誦をしているのに読誦を否定し、但行礼拝だというのであります。

つまり、修行の場、僧院、御本尊の前に於いて、御経を読む読誦では無く、生きている全ての生命の仏性に向かい、同じ二十四文字であっても、それは読誦では無く、自分自身を含む但行礼拝だということなのであります。確かに私達は、御本尊に向かい、朝夕読誦と思ひ込み勤行をしています。しかし、二十四文字（妙法蓮華経）は、読誦して安心し終了ではなく、本尊を、我が身を始めとして、一切衆生の生命を写す鏡とし、読誦では無く、自らの生命の仏性に、但行礼拝しているのであります。南無妙法蓮華経の唱題も、読誦で無く、但行礼拝なのであります。つまり、只壊れたレコードの様に、読み始めて読み終われば良いんでしょと、朝夕の崩れた早口の読誦では無く、身口意三業の但行礼拝しなければいけないのであります。南無妙法蓮華経と唱える事は読誦では無く、南無妙法蓮華経と生きる事なのでなければいけないという事なのであります。

唱題も、回数や時間をカウントし、百万遍唱えたら、宿命転換、宿業が断ち切れる、境涯が開ける、福運が付く、人間革命出来る等と指導され思い込んでいるのは、本尊も、唱題も、自分自身が幸せになる手段方法の踏台という思考ですから、どれ程勤行唱題をしても、それは信の勤行唱題では無いのであります。

大石寺も宝永元年（1704）に建立した。六万塔（唱題6億遍）に倣って、平成6年1月1日から100日間全国の信徒に、阿部さん自ら、1分間に40回の速度で、1時間2400遍になるからと計算して、創価学会と同じパターンの六万塔完成図を分割図にして配布して、一マスずつ塗埋めて行くという事をして、600億遍完遂と謳い上げた。自らの登座篡奪から視線を外し、創価学会との泥沼闘争、再折伏運動に邁進させるために、唱題を利用し、これだけ唱題しているのだから、自分達は間違っているはずがない、正統であると思考する手段に使ったのであります。まさしく創価学会がやってきた事と同じ発想なのであります。正しい信心をしているから、自分達は正しく偉いんだと慢心を持つのでなく、自分達は愚かな凡夫だからこそ、一番正しい法、成仏出来る法が必要なんだ。自分達が偉いんじゃない。信仰増上慢、唱題増上慢にならないように自戒し、信仰していない人々を、上から目線で見下げないようにしなければいけないのであります。

少なくとも宝永元年建立の六万塔は1700年の富士山斜面小規模噴火（後の宝永山噴火に繋がる前兆）1702年の赤穂浪士の討ち入り、1703年の四十七士全員切腹等々の世上の不安に対して、信仰者として本尊の前に端座して唱題し、何が有っても信仰を貫いて行こうという志の六万塔であり、世の中の安寧を法華経信仰者として御祈念したものだだったのであります。

南無妙法蓮華經と口で唱え、南無妙法蓮華經と心に念じ、南無妙法蓮華經と身をもって生きようとする、世の中に向けて正しく身口意（本来の順序は、身口意でなく、口＜南無妙法蓮華經の唱題（南無妙法蓮華經が何か、理解していないけれども、心が引かれ唱えてみる、清々しく感じる）＞→意＜南無妙法蓮華經の心（南無妙法蓮華經とは何かを少しづつ学び共感を憶える）＞→身＜南無妙法蓮華經の生き方（実行し妙法蓮華經の法に叶った生きようと努力する）＞口、意、身の順序でなければなりません）三業の御題目だったのであります。

私は以前、豊唾の御信者さんに、「唱題する時は、どの様にするのですか。」と質問したことがあります。その方は、筆談で「私は完全に発音能力が無い状態ですので、心で南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱えています。」と、答えてくれました。私は、自分で10分程、黙読で唱題する事を試してみました。驚きました。当たり前ですが、雑念が湧けば即南無妙法蓮華經は無くなってしまうのであります。私達健常者は、口は南無妙法蓮華經と唱え乍ら、心は違う事を思い、違う事をするという事を平気しているのであります。唱題しながら、家族に「炊飯器のスイッチ入れといて。」「御風呂の掃除しといて。」と、御題目を唱えると血の巡りが良くなるのか、次々と湧き上がる雑念を仏智のアイデアが浮かんでくると勘違いし、雑念の海に溺れ浮遊してしまっているのであります。

南無妙法蓮華經と唱えるという事は、雑念が湧いて来たらどうしようか、雑念をどう払うかではなく、南無妙法蓮華經しか考えない事。南無妙法蓮華經を信じるという事は、南無妙法蓮華經の生き方を一途にするという事だという事を改めて思い知らされた次第であります。

創価学会の様に、初めから、南無妙法蓮華經と何回も長時間唱えれば、病気が治る、お金が儲かると現世利益の為の手段の唱題と教えられれば、心も現世利益、身の生き方も現世利益の、口、意、身の三業全部が現世利益の但行礼拝に成り果てて、妙法蓮華經の法を名字即の心で信ずるといふ、自他の成仏を願目とする、但行礼拝の三業の題目を否定する、南無妙法蓮華經と言っている、南無妙法蓮華經でない、「論語読みの論語知らず」空騒ぎの雑音になっているのであります。

一般に言われる【身、口、意】の順序、初めから南無妙法蓮華經の生き方をし、南無妙法蓮華經と唱え、南無妙法蓮華經の心を持つ等という順序の三業など有り得ないのであります。

大石寺の六万塔も名前は同じ六万塔でも似て非なる、「多生曠劫の修行を経ても成仏すべきにあらず」であります。

次に【常不輕菩薩の跡を継ぐ】が、私達に示し伝えるものとは、何かを論じたいと思いま

す。

B 図

本 道

逆縁世界

【無量無辺不可思議阿僧祇劫】

無限（永遠）

源は<妙法蓮華経>

二十四文字但行礼拝

威音王如来同名二億人

常不軽菩薩（其罪畢已）

異教不信の四衆（畢是在已）

証明道

順縁世界

有限【五百塵点劫】

源は<妙法蓮華経>

我本行菩薩道 多宝如来（証明仏）

上行菩薩を上首 （東方世界宝浄国）

とする四菩薩

〔本化の菩薩〕

↓

竹膜を隔つ（大差無し）

↓

【三千塵点劫】

源は<妙法蓮華経>

大通智勝仏

16番目の王子

迹化の菩薩

↓

【インド降誕の釈尊】

四十余年未顕真実

法華經見宝塔品第11

法華經涌出品第15

法華經壽量品第16

法華經囑累品第22

<妙法蓮華經>を上行菩薩へ結要付嘱

【末 法】

常不輕菩薩の跡を継ぐ

時空を越えた信

末法萬年信行と成仏の姿

初随喜・無作・名字即の信

従因至果の世界

本尊の中には示されない、あくまでも

末法の法華經の行者（常不輕菩薩の立場）

として本尊（一念三千の法）に向き合う。

上行菩薩の再誕

法華經世界の完成を以って本尊顕る

有作の信

従果向因の世界

本尊の中に示される。

常不輕菩薩の世界観は左【本道】、上行菩薩の世界観は右【証明道】と示しました。最初のA図は、左を【上行菩薩の自覚】右を【常不輕菩薩の自覚】としましたが、B図は末法から押し切り換える意味で、左右を入れ替えました。

その理由は、常不輕菩薩の世界は一切衆生平等成仏、全ての法華經の行者、時空の、五百塵点劫、三千塵点劫、本化、迹化、在世、正法時代、像法時代等々の限定条件、束縛無く無条件の、私達が生きる末法萬年の久遠、無限の過去、無限の未来、永遠常住の世界こそ、本来のあるがままの【無作】の現実【本道】の世界ですので、その様に示しました。共通して有るのは【末法】と【信】という前提だけの共通認識のみであります。

右側の上行菩薩の方を【証明道】としたのは、【本道】は、諸法実相の妙法蓮華經の法が全ての源の本因の法であるという事を導き出す事が出来るのは、八万四千の一切の經典の中で、法華經の世界のみですので、日蓮大聖人が、法華經の世界の中で、自らを、どの様に位置付け、法華經の世界を完成させ、合わせて、【本道】である常不輕菩薩の世界へと合致切

り換えさせているかという点で、上から

【五百塵点劫】 【三千塵点劫】 【インド降誕の釈尊】 【末法】 という順に示しました。

【法華經に示される信の姿勢、立場】

法華經は、【信】を根本として説かれている法であります。

方便品第二の中に示される【三止四請】の釈尊の姿勢も、弟子達にただ一念三千の法を、略開三頭一から広開三頭一へ移る為に説くのではなく、弟子達が自分の事として求め、自分の事として責任を持つ様に三回、無理だろう止めときなさいと止め、それでも説いて貰いたいという、聞かされるから聞きたいへ切り換えさせて行きます。

そして、これ程説く事を釈尊に求めた事によって、説法が始まったにもかかわらず、いざ本格的に釈尊が説き始めると、五千人の増上慢の輩は「五千人等即從座起」として出て行きます。しかし、その人々に対して「世尊默然而不制止」は、釈尊は黙って止める事をしないのであります。

又、壽量品第十六の「良医の譬え」の中で、毒を飲んでしまい、のたうち回って苦しむ子供達に、「求好藥草 色香美味 皆悉具足 擣篔和合 与子令服」「是好良藥 今留在此 汝可服 勿憂不差」与えるだけ、服しなさいと置いて置くだけで終りであります。手取足取り教えない、自分で考えて求め学べの姿勢を貫きます。子供達の命がかかっているなら、子供が泣こうがわめこうが、歯をかみしめている子供の口をこじあけてでも、歯を割ってでも口に入れると思いますが、釈尊は置くだけ、その上「勿憂不差」（いえじとうれうるなかれ）もし効き目が無くて苦しみが無くならなくても悲しいと思うなど、言い放っているのであります。

そして、壽量品第十六の最後の結びの言葉は、「毎に自ら是の念を作く何を以ってか衆生をして無上道に入り速かに仏身を成就することを得せしめんと」（仏は常に妙法蓮華經の心を持って、どうしたら衆生が妙法蓮華經の仏道に入り速やかに成仏してくれるだろうかと願っている）これも、常に念じてくれていますが、念じてくれるだけであります。

これらの「三止四請」「默然而不制止」「今留在此」「每自作是念」から分かる様に、法華經の【信】に共通して貫かれているものは、衆生自らが求め、自ら信じ、自ら学び、自ら伝える。仏からの法を待つ受動ではなく、沢山の經典郡の中から、選ばれしエリートだけの成仏では無く、一切衆生平等成仏が説かれる真実の法を求め、真実の法に依って仏に成りたいとの思いだけで、能動として求め、指示を待つのではなく、飲めといわれたから飲むのでな

く、自分で飲もうと自己の渴きから来る欲求と責任で飲む。毒の深さによって即座に楽にならない衆生もいる、それに対して仏に文句を言うのではなく、自分を振り返えれ。仏は妙法蓮華經の薬までは「色香美味」飲みたくなるような、色も香りも味も考えて作った、しかし、それを汚い、臭い、不味いと思い、飲まない者は、仕方が無い、ずっと寄り添い、縁を与え、見守ろう。衆生自身が求める心で飲まなければ、その薬に効力は無い。口をこじ開けて強要し暴力を持って飲ませても、それはその衆生にとって毒になるだけだ、五千人の退席する衆生を制止しなかったのも同じであります。自ら真実の法を求め、自ら求めてこそ、【信】なのであります。【初随喜の信】【名字即の信】【無作の信】とは、そういう信であります。

この様に考えると、この妙法蓮華經の薬は、所詮苦悩する子供達を元に戻すだけの毒消しの薬であります。人間ですから、薬を飲んでも、三毒は無くなるわけではなく、人間界という正氣に戻る。三毒が暴れて、三毒に支配されてしまう苦しみでは無く、三毒は無くならず有るけれども、元の暴れていない状態に戻るだけであります。譬えて言えば、痛み止めの様に、病気から来る痛みは押さえたけれども病巣は依然として有るというだけであります。十界互具の生命から、三毒の原因になっている、地獄、餓鬼、畜生、修羅の生命を取り除く事は出来ないのであります。平静な人間界に戻すだけであります。

この事を象徴する教えに、【更賜壽命】が説かれています。多くの信仰者は間違った解釈をして、「成功率、生還率の低い難しい手術が必要な病気に罹り、妙法蓮華經の法を信仰し、南無妙法蓮華經の御題目を一所懸命唱えたので、無事手術が成功し、元の生活に戻って来る事が出来た。まさしく【更賜壽命】で命拾いした。」という風に言います。それはそれで喜ぶべき事ですが、この【更賜壽命】とは、病気克服、壽命の長短ではなく、妙法蓮華經の仏性に目覚めていなかった以前の生命と、目覚めた後の生命、壽命を賜るとは妙法蓮華經の生命に目覚める事を示しているのであります。譬え生命が短命で果てるとも、人間としてこの世に生まれ、妙法蓮華經の法によって妙法蓮華經の仏性に目覚める生命こそが一番尊い事を示しているのであります。どれほど長命であっても、妙法蓮華經に縁し、目覚める事が出来なければ、妙法蓮華經の道理の上に置いて尊いという事にはならないのであります。

つまり、妙法蓮華經の薬は基本的には三毒の毒消しですが、仏性に目覚める機縁、人間界の正氣に戻ってから、今度は自分自身が妙法蓮華經の法を信じ行じ、自分の生命の根本中心に具わる、一念三千の仏性を自ら求め感応体得する為に信行に励まなければいけない、体得してこそ信心なのであります。妙法蓮華經の薬を飲んで（唱題）終わり、カウントして終わり、満足してはいけないのであります。薬を何千錠、何万錠飲みましたという事に

満足し、誇りにする信仰では無いのであります。自分の生命、他人の生命、全ての生命に【我深く汝等を敬う】仏性をかすかでも、瞬間でも感じて、十界五具の凡夫ですから心はコロコロと変化し、忘れたり、怠けたり、疑いを持ったり、思い出したりしますが、仏性を感じる、信じる瞬間瞬間の心を紡いで紡いで、縁する人にも、この事を伝えて行く事が、南無妙法蓮華経と唱え、南無妙法蓮華経の心を持ち、南無妙法蓮華経の生き方をする。口、意、身三業の本当の意義なのであります。

「研鑽と信仰は別だ」と嘯く人達がありますが、「経済学と経済は別だ」「医学と医療は別だ」「政治学と政治は別だ」という研究者がいるのでしょうか。研鑽によって明らかになった事は、信仰の為、一念三千の仏性を体得する為に皆に伝え実行し、日蓮大聖人の生き方、法を手本にし近づく為に用いて行かなければならないのであります。

私は、日蓮大聖人が【方便品第二の世雄偈】を確かに読まれていたという事が分かれば、読むべきだと考え、実行出来るのだから、実行して来ました。皆がしていない、長くてめんどうだ、方便品だで省略していて良いのでしょうか。【日興上人が大石寺を開いてから丑寅勤行がされて来た】ならば、毎日は難しいけれども、せめて1日7日13日15日だけはどうも、実行して来ました。【日蓮大聖人、日興上人の御影は但薄の衣、白五条の袈裟を着用し、絵柄綾織の袈裟衣を着用していない】ならば、弟子の立場の私達は当然着用すべきではないと考え着用していません。【建長五年四月二十八日は宗旨建立では無いと、内外共に表明しなければいけない】と、訴えて来ました。実行出来る事は実行するのが、信仰の手本の日蓮大聖人の心を知り、心に近づき、一念三千の仏性を体得する道なのではないのでしょうか。草鞋を履いて、自動車、電車、飛行機に乗るな、鎌倉時代の様な生活をしなければいけないと考えているのでありません。分かった事を実行しない人達は、どうする事が『祖道の恢復』『宗風の刷新』だと考えているのでしょうか。何もしない人は、何をしているのでしょうか。実行していない者が、実行している者を嗤う。そんな事を続けていて何が生まれるのでしょうか。『祖道の恢復』『宗風の刷新』というのは、そういう一つ一つ生き方を改めて生きて行くという事なのではないのでしょうか。日蓮大聖人、日興上人、日目上人の着用されなかった絵柄綾織の袈裟衣を着続け、偉く見られたいとの心を持ち続け、『祖道の恢復』『宗風の刷新』と言って、長い、面倒くさいと、世雄偈を読まない、建長五年四月二十八日を宗旨建立と言い続けている人達は、何をどう恢復刷新したのだろうか。何をもち「法門研鑽と信仰は別だ」などと言う事が平気で言えるのだろうか。

正信会自体も今生きている正信会僧侶、住職が亡くなった後も、正信覚醒運動を未来に継

承していかなければいけない。その為には宗教法人正信会として全体を連合包括組織として、住職が無くなった後も信心の拠点である寺院が個人の財産でなく公的財産として全体で協力維持出来る様にしていこうという考えの方々と、いやいや単立宗教法人は良いけれども、包括関係を結ぶと、大石寺時代と同じ様に自分達の裁量の自由が束縛されるから嫌だ。という方々と分裂しました。その宗教法人設立に反対した人達は、正信会発足当時に立ち上げた「継命新聞」を機関誌として、自分達の意志を発信し、宗教法人設立賛成発足した人達は「妙風新聞」を立ち上げ自分達の意志を発信する様になりました。宗教法人設立反対の方々の中には、正信会発足以前から、大石寺の「戒壇本尊絶体」「血脈絶体」は、日蓮大聖人法門ではないという事を始めとして、大石寺法義の矛盾点を指摘し、こうあるべきであると提議し、正信会の法門上のリーダーとなっていた人達がありました。その人達は、設立に至る経過説明、条項説明の議論段階に於いても、包括宗教法人設立反対と言うものの、何故反対かと言う具体的理由を、発信してくれませんでした。分裂した後も、反対の理由を明らかにしてくれていません。極端な人達は単立宗教法人設立さえ反対と言っていたにも関わらず、分裂後、自坊の単立宗教法人を設立したと聞きましたので、驚き、何故、どうしてと思いました。が、変節の理由表明が発信されていませんので分かりません。その上「継命新聞」の論調を見ていると、「戒壇本尊絶体」「血脈絶体」を正信覚醒運動の中で、否定して来た人達が、先祖返りし「戒壇本尊絶体」「血脈絶体」と主張しているのであります。どんなに間違っているか、小僧の時から骨身に染みる様に教え込まれた考え方に戻って行くのが一番心地良いのかなと、刷り込みの恐ろしさを感じますが、何故、正信覚醒運動発足以前から法門の改革リードをして来た人達が、「継命新聞」の先祖返りに見て見ぬ振りをして、中間派と嘯き、ブレーキをかけず、かつ諫言せず、自己矛盾の自爆行為である事を指摘しないのか不思議でならないのであります。法門と信仰、生活、人間関係、義理人情、世渡りは、別物なのでしょうか。信仰にとって一番の罪過は自己矛盾だと思います。

【下種】【賜る】【末代幼稚の頸に懸け】という表現がされるので、仏から下種されるまでは、その生命には種（仏性）が無いように思い込んだり、解釈する人が多くいますが、それは間違いであります。妙法蓮華経の仏性は全ての生命に元々本然と具わっている法であります。仏種とは、仏性、仏界の生命の事ですから、この仏性を元々持っていて、自分が持っているとの自覚が無ければ、持っていないと同じなのであります。下種されるまで、賜るまで、頸に懸けられるまで無かったとなれば、その生命は、それまで、仏界の無い、九界互具

の生命だった、下種されて初めて十界互具になったという事になってしまいます。永遠常住に全ての生命は十界互具の生命ですから、そういうことは有り得ないのであります。持っている事に気付かない衆生に、下種という視覚的にイメージしやすい表現をし、それを縁因仏性として、妙法の縁に触れる事によって、仏性が元々本然として、自分の生命に具わっている正因仏性に気付いていない者が目覚める。そして自分が法華經の行者として生き、了因仏性を自覚する。そして自分が法華經の行者として生き、三因仏性を自覚する。という表現なのであります。「いつ、どこで、だれかに、もらう」のでは無いのであります。【本未有善】【本已有善】で、在世の衆生と末法の衆生を立て分ける事を大石寺教学の中で良くしますが、【本未有善】も【本已有善】も釈尊を主体にして、釈尊から未だ下種を受けていない衆生。已に受けて居る衆生という選別であります。B図の右側の世界には可視化の方便として釈尊からの下種を受けなければ、仏種が無いという方便話がまことしやかに通るかもしれませんが、仏種、仏性は誰かに貰うものではなく、元々本然として具わっているものなのであります。まして【無仏】【無經】の末法の衆生が何故釈尊から下種されなければいけないという話になるのでしょうか。そういう意味で、江戸時代に捏造され、世の中に忽然と現われてきた来た、【二箇相承】の一つ【池上相承書】などは、偽作者が大石寺法門を理解していなかった為、冒頭で【釈尊五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す】と馬鹿馬鹿しい泥棒の足跡を残してしまっているのであります。日蓮大聖人の仏法は完全に末法を基軸にして説かれているもので有る事が理解出来ていない、釈尊本仏の信仰者が偽作すれば、こう書けば、人々は平身低頭して有難がるだろうとなるのであります。この様に、A図の右側、上行菩薩の再誕に至るコースは、この可視化の方便の世界構成で、説明されているのであります。右側は左側に入り混線交じり合うことは出来ない、完全に切り替え、別の世界なのであります。その切り替えの真ん中に存在するのは、日蓮大聖人だけなのであります。

右側の【上行菩薩の再誕】は、日蓮大聖人だけの世界であり、【常不輕菩薩の跡を継ぐ】は、日蓮大聖人をはじめとして、日妙聖人、妙法比丘尼、熱原農民の様な、法華經の行者誰もが目指す世界であります。そして、五百塵点劫にも、三千塵点劫にも、在世、正法時代、像法時代等々の約束、条件を超越し、世の中にある沢山の宗教の中で、信じるならば、一切衆生平等成仏の正しい法を信じたい、食欲、性欲、睡眠欲の様に、腹が減れば、御飯が食べたい、まずいものよりも、美味しいものを食べたい、自分の子孫を残し繁栄させたい、眠たくなったら寝たいという欲と同等に、過去世、未来世の生命をも救いたい。その欲を満たす。一切衆生平等成仏の法を【信】ずるだけの世界に、法華經の行者として生きる事が成仏の姿

であるという世界であります。【従果向因】の仏が南無妙法蓮華經の法を説き可視的に下種、付嘱する、仏を中心として展開する世界であります。

末法の我々凡夫が手本とし成仏をしなければいけない【本道】は、B図左側の【常不輕菩薩の跡を継ぐ】だけなのであります。そして、この【本道】は、初めからすべて逆縁の世界【其罪畢已】【畢是在已】の南無妙法蓮華經の法が中心の世界なのであります。右の【上行菩薩の再誕日蓮】の側は、空理空論の方便の世界、順縁世界の信、なのであります。B図左側はどこまでも南無妙法蓮華經の法を中心にした【末法】と【信】の【従因至果】南無妙法蓮華經の法のみによって成仏出来る世界なのであります。

時代は、あたかも、2019年12月中国武漢から全世界に感染拡大していったコロナウイルスは、世界中で、現在600万人以上の死者を数えるに至り、未だ終わりが見えません。世の中の今迄の常識、社会構造、産業構造、経済構造等々は悉く崩れ、構造構築を無理矢理に作り、社会も、戸惑いながら受け入れざるを得ない様な、苦肉の策だらけの、取り敢えずの社会になっています。一度動きだしたら人間の理性では止める事の出来ない、大量生産、大量消費、大量廃棄、大量汚染の連鎖を、コロナが立ち止まらせ、振り返えさせた。今迄人類が、この地球の所有者の様に思い込んでいたが、そうでは無い事を思い知らされた。

コロナウイルスも生き残る為には変異を繰り返す為に終わりは見えない。ウイルスはコロナだけではありませんから、コロナ以上のウイルスが温暖化で氷河から溶け出し過去の生物から現われて来る事を考えると、コロナを始めとして、次々と色々なウイルスと共生していかなければならない社会になって行く事が容易に想像出来ます。せめて、インフルエンザの様に5割以上コントロール出来る様になるまでには、まだまだ時間がかかると思います。人間はこんなにも儂く脆く、地球の所有者では無いのだ、という当たり前の事を教えてくれた。いずれにしても、そんな事が有りましたかねという一睡の夢の様に元の社会構造に戻る事は出来ない。歴史の教訓を忘れやすい人類に対して、過去の物と言えないように常に平行共生して行かなければいけない状況になって行くのではないかと思います。

コロナ程の強い感染拡大力と、長期化、重症化で世界的社会構造を激変させる程の存在を知らなかった時代には、天井知らずでバラ色に発展して行くんだと言いながら、人類は、汚染、公害、地球温暖化、溜まる一方の原発廃棄物等々から目を背け、地球を破壊し、ゴミ溜めになったら違う惑星に移住できる様にと、そんなものが人類の発展進化なのか、破滅退化なのか分からない営みをして来ました。この現状にコントロール不能のコロナは警鐘と

して痛打を与え、人類の愚かさ脆さに気付かせてくれていると考えます。

もう一つはロシアが2022年2月24日ウクライナへの一方的な侵略戦争の勃発であります。私自身個人的には、世界の農産物、経済、文化等々全てが繋がっている事を一般庶民に至る迄知っている現代において、まさか、国と国が、脅し合い、罵声を浴びせ、批判し合うという関係悪化は、あったとしても、まさか「正義の戦争」「ウクライナは兄弟」と言っ、凄惨残虐な大量殺戮が、常任理事国を名乗る大国ロシアが、何の理性も抑制も無く行うとは考えていなかった。改めて人間の、地獄、餓鬼、畜生、修羅の泥沼の様な深い闇を感じた。一人の権力者の欲望の為に、何十万人もの生命が失われ、人生、家族が失われて行く。毎日毎日嫌という程、虱潰しの様に街を破壊し、殺戮されていく映像を見せられていると、人間の欲望の底なし沼の狂気、人間はここまで狂う事が出来るのかと、思い知らされます。誰にも同じ血が多かれ少なかれ流れているんだ、コロナより、やはり一番恐ろしいものは、人間が犬畜生と呼ぶ生命より、人間は下である事を改めて自覚しました。

ロシアのプーチン大統領はロシア正教の敬虔な信仰者だというのであります。テレビの映像に、ウクライナに向かうロシアの軍服の兵に対して、ロシア正教の神父とおぼしき姿をしている人がランプの様な物をかざしてブラブラと揺らして簡易な洗礼の様な事を教会内では無く外でしていた。戦争を止めなさい、人殺しを止めなさいでは無い、殺人、破壊を奨励する宗教なんだなと愕然とした。

私は、或る意味、世界は、何百年と「聖書」の内容によって作られた価値判断という物差しで歴史を刻んで来たけれども、「聖書」を原典として、自由、平等、愛、平和と主張して来たけれども、現実の「聖書」の内容は、人間を神の下僕として支配される不自由、生命の差別を当然と肯定し、人種差別も肯定し、男女差別も肯定し、異教徒差別も肯定し、神父と十字軍は連動し、布教、侵略、殺戮を繰り返した。天地創造を言いながら、天地がどの様に造られたかも分からず、地動説を訴える人々を宗教裁判にかけ、殺していった。今でも多くのキリスト教徒は進化論を否定している。ヒットラーのユダヤ人虐殺も知りながら、カソリック、プロテスタントは見て見ぬ振りをしていた。黒人奴隷制の是認、イルカは賢いから保護し、豚や牛は食べられる為に産まれて来た、ジェンダーは認めない、人間は神に一番近い存在だから、人間以外の他の命の殺生与奪の権利は人間が持つ、神が天地創造し始まったのだから、神が天地の終わりを告げる事は当然。神がサタンを皆殺しにする最終戦争（ハルマゲドン）が起こり皆殺しにして、絶対的平和がこの世に訪れる、神によって殺される者は、殺される事によって救われる。神ならば殺人してもかまわない、サタンならば殺す事は正義

であり、良い事だという考え方であります。まさしくアーメン、（全ては神の思召すままに）であります。仏教經典の、どこにも、仏を始めとして、どんな存在、立場であっても、殺人が肯定される事は一切ありませんから、仏教の各宗各派が、教義の違いから声高に批判し合う事はあっても、殺し合うという歴史は有りません。自殺も沢山の生命の繋がりの中から、借り物として授かった命ですから、自分の生命は自分のものでは無い、自殺は殺人と同じです。全ての生命と繋がって、支え支えられあって生きているのだから、持てる全て力を一生で使いきって生涯を全うする義務がある。誰でも最後は必ず死ぬるのだから、死んだら楽になれる、と思い込んで自殺しても、楽になれない、今以上に苦しまなければならない因果が待っている事を三世常住、永遠の生命から見つめ直して行く事を理解しなければいけないのであります。悪だけが固定化されたサタン人間はいないのであります。悪だけのサタンなど『聖書』の中だけの荒唐無稽の作り話なのであります。全ての生命は【十界互具】で、仏の生命から地獄の生命まで渾然一体となって存在し、地獄だけ100%固まっている生命も仏界だけが100%固まっている生命も無いのであります。

折伏とは、議論であります。真実が何かを互いが探究する為に、言葉と文字による議論を重ね、それを多くの人々が客観的に見聞し、どちらに普遍性と一切衆生に通ずる包含性が有るかを判断してもらうのが真の折伏であります。（創価学会は、その言葉の中に嘘であっても、何を言っても赦されるという仏教以前の世間の法律から外れるもので有りますから、私は折伏では無い、妙法蓮華經に縁している、縁させている、信の行為ではないと、断言しました。）神であろうと、殺人が赦される教えは、生命の全面否定であります。どんな存在でも生きて導かなければ導き救うとは言えないのであります。『聖書』の、こんな不自由と不平等と無慈悲な教えの未来に、自由と平等と平和と愛が有る訳が無いのであります。天国も幻想というよりも、それは有り得ない嘘であり、有るのは、不自由、差別、非情、殺人、殺戮、戦争しかないのであります。こんな『聖書』が作った、矛盾し直線とメモリが狂った物差しをこれからも、そのまま使い続けてはいけないのであります。壮大な救いのない人体実験が今迄の2000年の歴史であり、同じ偽り愚かな物差しをこれからも使い続けて行けば、今よりも悲惨な未来になることは間違いないのであります。

本当の平和は、全ての生命に仏の生命が具わり、全ての生命が仏に成る事が出来るという法華經の教えを全ての人々が基本とする物差しにしてこそ、真の自由と平等と慈悲、平和があるのであります。その事に全ての人々が目覚めて行かなければいけないのであります。

しかし現実には、どれ程法華經の教えが、真の自由と平等と平和を説いていても、法華經を信仰していると言いながら、大石寺や創価学会や顕正会のように、南無妙法蓮華經の御題目を数を競い唱えながら覇権主義的に広宣流布を考え、今日蓮を名乗り利用する人間が後を絶たないのであります。共産主義も富の平等分配を主義思想と掲げ乍ら、現実には、専制君主制となり、独善者を産み、独裁者は政敵を排除し殺し、権力者の富の為に利権を当然の事とし、平等分配は考えもしない。最高唯一の富である人民の生命まで、主義思想の運用と、権力者の地位を守る為なら、虫けらの様に殺し、土地建物も奪う。世襲制など、共産主義から産まれて来るはずがないにもかかわらず、現実には、北朝鮮の様に存在しているのであります。

資本主義、自由主義も、欲望の野放しで、嘘の情報操作、多数決優先、権力、財力優先等々、義務と責任も放棄し、自由と権利だけを主張する。薬も銃も、どれだけの人々が、その為に死に苦しみ悲しんでも規制できない。しない。義務よりも権利の自由の優先、自分が飲食をして肥満体になっても、タバコを吸って癌になっても、メーカーが注意を怠ったからだとか裁判所に訴え勝訴する自由、こんな付和雷同の利権に流される主義思想がすすんでも、未来を切り開き発展安定させる未来が有るはずもないのであります。つまり、法を中心に置いて、法を犯す行為は一人でも国家を訴える事が出来るという自由主義、どんなに嘘の情報で出来上がった虚像でも選挙投票で議員、大統領が選ばれ状況を転換させる事が出来るという主権在民のシステム。それは、それが出来ない共産主義からすれば、よりましだと思いますが、どんな主義思想でも、人間の性というものが根底にある以上、主義思想で人間の生命を守り、平和で安穏とした平等な繁栄を実現し救うという事は出来ない所以であります。法華經も他經も、原典は同じであっても、解釈の違い、思惑の違いで様々に枝分かれする為に、その組織や指導者の洗脳によってカリスマ性に心酔する人々が多く、後を絶ちませんが、それでは救われないのであります。法華經の行者として生きる上で、自他共にカリスマ性はいらぬし邪魔なのであります。あるがまま等身大、大きく見せる事も、卑屈に小さく見せる事もいらぬのであります。常不輕菩薩は、あるがまま無作で、有徳王、覺徳比丘の勇ましさも刀を振り回す剛腕もありません。危害を加えられそうになると走って逃げて距離を保ち、又遠くから「我深く・・・」と但行礼拝を繰り返す。ただ特攻隊の様に犬死、無駄死と分かっている死ぬ事が法華經の行者として生きる事では無く、日蓮大聖人は、どこまでも法華經の為に生きる事を求めたのであります。龍ノ口法難に際し、四条金吾が泣いて後追いの切腹しようとの仕草が見えた時、「これ程の喜び笑えかし」と戒め止めます。日蓮が殺される事を悲しんで一緒に死ぬのでなく、法華經の為に生きて生きて生き抜いて、日蓮が法華經

の為に、どう生きて、どう死んだか、それを同信の人々に四条金吾が正しく伝え、それぞれの者がそれぞれの法華經の行者として法華經の為に生き貫き、死の恐怖にも負けないで最後迄信を貫く事を求められたのであり、死を美化する点は一切有りません。池田大作さんは、「俺の弟子なら、俺の為に死ぬるか。」と度々弟子に脅し、確認していたそうですが、そんな師弟はヤクザの世界の感覚であり、信仰者では無いのであります。どんなに組織、指導者に縁をしても、自分の心を殺し、否定し、洗脳され入れ替え、指導者の為に死ぬ必要など無いのであります。師も弟子も法を根本として誰もが日蓮大聖人の弟子として、一人一人が依法不依人の絶対的基準を常に意識し、指導者の指導、組織の運営を検証しながら、一切衆生平等成仏の法華經の法を實踐し、【汝等菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べしと】法華經の行者として生きる心、姿こそが成仏であると、一人一人が感得して行くのが、本当の成仏の道なのであります。

「日蓮が如くなりたくば、日蓮が如くせよ」と示されますが、私達は日蓮大聖人の完全コピーをする必要も無いし、出来ないのであります。日蓮大聖人は唯一人、日蓮大聖人だけあります。龍ノ口法難も佐渡流罪も、私達には出来ないし、現在の日本社会において、総理大臣に「立正安国論」の様な主旨の国家諫言書を提出しても、無視されるか、「御意見受けたまわりました。」と言われるだけで、逮捕され、首を切られるという事はありません。しかし、同じこの日本で、ほんの少し過去に、南無妙法蓮華經の法を訴えるどころか「天皇も人間である」と言っただけで、逮捕され、拷問にあい、死に至った人達がいた時代があったのであります。今ロシアでは「戦争反対」と言っただけで刑務所に入れられてしまいます。中国では、「人權の平等」現実にあった「天安門事件」を言っただけで逮捕されてしまいます。

それぞれが、それぞれの、唯一の人生で、法華經の行者として生き、色々な試練にぶつかりながら、その時その時、日蓮大聖人だったなら、この事をどの様に考えるだろう、どう判断し、どう生きるだろう、向かうだろうか、引くだろうかと、一所懸命考え、法華經を中心にした生き方を心掛ける。自分が出来ない事をしようと吼えてみても出来ない。しても出来ない、続かないのであります。どんなに、倒れても、さぼっても、曲げて、又立ち上がって修正して、法華經の行者として復帰して生きる。無様で、みじめったらしく、泥だらけでも、それがあがるがままの自分、常不輕菩薩の生き方、逃げて遠くから、又遠くから、「我深く汝等を敬う・・・・」の但行礼拝する信の姿であります。

日蓮大聖人の仏法にとって、必要不可欠な、出家から入滅、そして現代に至る迄、貫かれているものは、【末法】であります。

しかしながら【末法】は、特別日蓮大聖人が作った独自のものではなく、この日本だけではなく、仏教国全体が【末法】という時代に向き合い混乱に彷徨う時代を経験したのであります。

日蓮大聖人は法華経の系譜、三国四師、インド、中国、日本。釈尊、天台、伝教、日蓮を中心に、仏法を考えていましたから、天台大師智顛が拠りどころとした『周書異記』に示されている。釈尊の入滅をBC949年に定め算出した、正法時代1000年AD51年、像法時代1000年1051年、末法時代1052年からを、物差しにされています。しかし、これは日蓮大聖人だけではなく、大半の仏教関係者、教養人、国家為政者も同様に、この物差しを用いて考えていたと思われるのであります。この【末法思想】とは、釈尊の滅後、その教法の功德力は次第に消滅して行くという内容であります。しかし、この【末法思想】の中心をなすものは、この法華経の本門に於ける、釈尊自身の言葉が一番【末法思想】の源になっているのであります。つまり、法華経本門に於いて、釈尊は、自分の滅後は、この法華経の妙法蓮華経の法を信仰の中心としなければいけないと、説かれているからであります。正法時代は釈尊在世の実像(正)記憶を抱いて、釈尊が生きていた時は、こうだったああだったで、強い信仰心を抱いて社会が成り立って行く。次の像法時代は完全に釈尊の面影(像)だけの世界になりますが、偉大な釈尊の存在した事を疑う人々は皆無である時代で、八万四千の経典の中の、何某かを信じ、自分の生き方を糺していくという人が社会の大半であったのであります。しかし、この正法時代、像法時代が過ぎ、末法万年(永遠)という時代に入ると、釈尊なんてのが本当にいたのか、こんな教えが何の役に立つんだ、戯言じゃないか。という人間が主流となり、

【白法穩没】

「次の五百年(末法)には我が法の中に於いて鬪諍言訟して白法穩没」大集経巻55と示され、無経、無仏の世界に入っていく事が予言的に示されているのであります。

この事から、中国に於いては、隋、唐の時代に、来るべき、釈尊の教えの功德力が無くなり、釈尊中心の信仰が成り立たない、無仏の末法時代を、どう乗り切るべきかという不安と混乱の時代になって、緊急に釈尊に替わる経典、釈尊に替わる仏を探し立てなければならぬと考え、三階教や浄土教が生れて来ます。日本に於いては、日本では、西暦1052年が永承7年に当たります。宇治平等院は、この年に末法時代を迎え不安と混乱が社会に拡が

る事を抑え乗り越えるために、この世の極楽浄土を釈尊に替わる、阿弥陀如来を本尊とする鳳凰堂建立によって表しました。中学時代の修学旅行で行った時、私は幼いながら感覚的に、極楽とは、こんなに薄っぺらい下らない物なのかと感じました。貴族の摂政関白政治は爛熟腐敗し衰え、武士の不満が頂点に達し、全国各地で動乱が起こり、治安の乱れが頻繁に起こり、社会の不安は日に日に末法思想と混じりながら増大して行きます。「平家にあらずんば人にあらず」と言い放ち、朝廷を思うままにした平家も、1164年巖島神社へ、平家一門の現当二世の繁栄を願文にしたためて、「法華経28巻」「阿弥陀経」「般若心経」を納経し、現在国宝に指定されていますが、何を信じているのか分からない、とりあえず世の中で流行している、良さそうな経典を、法華経と阿弥陀経の内容が矛盾する事も知らず、紺紙金泥の高価華美贅沢の極みの巻物に仕立てて納めた訳ですが、この無様な内容も、末法思想にうろたえる権力の哀れな姿の露呈なのであります。そして、日本人というのは、こんな時代から、何の節度もなく、下手な鉄砲も数撃ちや当たる的、何本も保険を掛ける様な信仰を何とも思っていない、むしろなんでも拝んでおけば宗教的争いが起こらない共存共栄美德の様に考えていたということが良く分かります。究極の現世利益目的の信仰と言えらると思えます。しかし、これは日本人の美德でも何でも無く、議論して真実を明らかにする事が出来ない民族だという事なのであります。

法華経は、公家、権力者、知識人、名家等々の、基本教養として読まれていた経典であります。法華経を通り一遍読んでも、何故日本に、上行菩薩信仰、常不軽菩薩信仰が生まれないうで、観音菩薩、弥勒菩薩、薬師如来信仰が世の中に根深く広く流布したのか、法華経の中で、重要な働き等無い、単なる衆生を慰撫する現世利益しかない、末法に何の縁もない仏菩薩に対するおすがり信仰が垂れ流しにされ、観音菩薩、弥勒菩薩、薬師如来は、いかなる法を持って衆生を救う事が出来るのかという事は、全く考えもしないのであります。日本人は本当に上っ面だけの、多くの人がやっているからという付和雷同同調体質であるという事が良く分かる証左であり残念な事だと思えます。

仏教界に於いても、シャーマニズム的政治から法を中心にした政治と国民の道徳心を高めるために、奈良時代初めて国家為政者によって導入され、国家安泰即為政者一族の安泰繫栄平和を祈る、一般庶民の参詣を拒絶した国家宗教であった、東大寺、法隆寺、薬師寺等々の国寺、また天台宗等の腐敗や僧兵の出現によって、信仰ではなく権力闘争の拠点と化していた。この現実世相と末法思想が現実のものとして繋がり、無教、無仏の末法を乗り切るためには、釈尊の仏教とは違う教え、釈尊とは違う仏を取り敢えず探さなければいけないと考え

るようになっていくのであります。この末法思想の中心をなす經典はやはり八万四千の最後に説かれた（最後は涅槃經ですが涅槃經は法華經の落穂拾いの御經で、改めて法華經の大切さを補強する内容ですので、教義的には法華經が最後の御經となります。）法華經本門に一貫して釈尊が示した、自らの滅後の記述なのであります。

承久三年承久の変に頂点に達した、源氏と、朝廷を乗っ取るまでに癒着していた平家側との戦いによって、完全に朝廷は為政者から追放され、今日に至る迄、権力バランスに利用されて瞬間的に戻ることはあっても、実質戻ることは、令和の今日まで一回もないのであります。この激変は、それまでの常識と考えていた価値観が全部ひっくり返り、武力、財力が、全ての基準になっていく訳ですから、世の中全体が殺伐としていくわけでありまして。日蓮大聖人の両親は、一般的推量では、朝廷側に仕える仕事をして生活していて、この権力の転覆によって公職追放になり、取り敢えず、その日その日を生きて行く為には、その日その日に食べ物が手に入る（荒れた天候や不漁で手にする事が出来ない日が続けば、食べる出来ない日もありますが）近場に魚を売り歩き、少しの生活費を得る生活をするしかなかったのであります。まさしく末法思想そのものの歴史の中に三人の人生が貧しくギリギリの毎日が営まれていたのであります。日蓮大聖人も幼少の頃から、このような生活を手伝って生活し、両親は、一人っ子の善日麿に、俄か漁師の仕事の家業として継いでもらう事も、自分たちの老後の心配世話も一切考えず、自分達が権力武力に翻弄され、思い描いた人生を歩むことが出来なくなってしまった。善日麿には、どんなに権力武力時代によって世の中が変わろうが、何物にも変わる事のない、翻弄される事のない絶対の真実を見出し、世の中に伝え、苦しみ迷いもがく人々を救って貰いたいとの思いで育て、当時、学問の道は寺院にしかありませんでしたので、房総半島内一の大寺は清澄寺でしたので、教義、宗派等々は考える迄の知恵は無く、この清澄寺住職道善房を師匠とし出家を志したのであります。出家し分かった事は、大寺でも、地域の法事や葬式、相談事で頼りにされる程度の事で、学問を極めるほどの本も無く、師匠を始めとして、教義に深い造詣を持つ学僧もいない、人間的に暖かく優しい先輩はいても、仏教の真理の探究をここにいて教えてくれる人はいない。と、早期に判断し、まず鎌倉に遊学し、当時の世の中が一番流行している宗教事情を目の当たりにしてきます。そして一旦清澄寺に戻り、今の時代に流行しているだけの宗教ではなく、各宗各派の日本に仏教が伝来してからの歴史と各宗各派の教義の繋がり、一切衆生平等成仏の法は一体何処に説かれてあるのかをとことん探求しようと長い過酷な遊学の旅に出ます。奈良、京都、高野、比叡山、大阪等々16年余りの探求遊学の日々を送り、一切衆生平等成仏の法は唯一法華經し

かない。法華經こそが無教、無仏の末法思想の中で、ただ取り敢えず闇雲に釈尊以外の阿弥陀如来、大日如来、薬師如来等々に求めればよいというのではなく、そこには整然と、末法と娑婆世界の担当に当たる仏であるか、文証、理証、現証が揃い説明出来る教えと仏でなければならない。その上で、現在世の中に末法を乗り越える力を持っているとされ流布している阿弥陀如来、大日如来、薬師如来は、娑婆世界、末法時代の担当仏でも無い、末法に何の関係も無く、その依経とする経典には一切衆生平等成仏の法は説かれていない。ただ、その仏に任せ、すがりだけの教えである。ただ釈尊以外の他の仏、他の経典を求めれば良いではなく、必ず釈尊は、経典の中に末法に叶う教えは何かの示唆を残しているはずだ、それを見出さなければいけないと、平安時代から鎌倉新仏教といわれる時代に生まれた浄土宗法然、浄土真宗親鸞、時宗一遍、曹洞宗道元、臨済宗等々は、釈尊に替わる仏、中国で末法思想の最中に流行している教えという感覚で選り日本に伝えた開祖宗祖で、教義として末法に適合していない教えなのであります。つまり、それらには無教、無仏を乗り越える一切衆生平等成仏の法は説かれていないということなのであります。

日蓮大聖人の【四箇の格言】は、非常に乱暴で激しい言葉に聞こえ、アレルギーを持っている人々を多く産んでいます。法華經以外の教えには成仏できる内容は無い事をに目覚めて貰いたいとのキャッチコピーなのであります。【念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊】念仏だけが無間地獄ではなく、全宗無間地獄、全宗天魔、全宗亡国、全宗国賊なのですが、それぞれの宗派信仰者に、あれっど動執生疑を起こさせ、立ち止まらせ振り返り考える心を持たせるための言葉で、これをきっかけにして、正しいと信じ込んでいる信仰を改めて点検してもらいたいという思いなのであります。

【大難四ケ度小難数知れず】と表現される日蓮大聖人の生涯の一番の始まりは、【立正安国論に始まり立正安国論に終わる】と表現される様に、文応元年（1260）7月16日現執権は北条長時であるにもかかわらず、院政をひく最大の実力者、最明寺入道、北条時頼に【立正安国論】を国諫書として出しているなのであります。公式文書でなく、私的文書として扱われようと、現実の世の中を現実に糺しめたいとの思いが、そうさせたのだと思います。この【立正安国論】は、最初から最後まで末法思想に貫かれ書かれているのであります。末法の証として、金光明經、大集經、仁王經、薬師經を引用し、【三災】刀兵災、疾疫災、飢饉災【七難（薬師經）】人衆疾疫難、他国侵逼難、自界叛逆難、星宿変怪難、明薄蝕難、非時風雨難、過時不雨難等々が頻りに起こり、社会の不安、人心の不安に対して、幕府の打つ手は裏目裏目に出て、何も改善されず、どんどん状況は悪くなって行く。これは、幕府が輸入し

た禅宗を始めとして、真言宗、念仏宗、律宗等々、成仏できない教えそれぞれに祈祷させたり、何宗でも庇護し、その場その場をしのぐことが出来ればという信念の無い事を繰り返しているからだ。はやく公場対決させ、各宗各派の一切衆生平等成仏は勿論、世の中を安穩にする力も無い事を白日の下に明らかにすべきだという事を訴えます。絶対的権力と、自ら入道するまでに禅宗の教えを信じているにもかかわらず、法論する事を拒否し、日蓮大聖人を伊豆伊東へ流罪し、幕府に逆らえばどうなるか身に染みて分からせれば、今までほとんどの僧が、手の平を反して、媚びを売る猫の様に生き方を変えた。日蓮もそうなるだろうと内心の怒りを抑えて無視した。しかし、日蓮大聖人は伊豆伊東赦免になって鎌倉へ戻って来ると前にも増して、立正安国論の主張と、それに対する幕府の対応のあるがままを一般大衆に向かって説き、法華経への信仰こそが、末法の不安と混乱を乗り越える真実の力になる。何故【念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊】なのかと辻々に立って説いて行きます。天下に法を發布して、一番にその法を守らなければいけない幕府が、法の裁きに掛ける事もせず、法を破って迄日蓮大聖人を闇から闇に葬ろうと、人目のない真夜中丑寅の刻、龍ノ口刑場において斬首しようとしています。自分達天下人の権力が通じない人間がいる事を認めざるを得ない策尽きて敗北を認めた処刑ですが、それも、その瞬間に低い弾道で火球が龍ノ口上空に飛来し、平の左衛門は、これを自分始め一族への祟りではないかと考え、自己の判断で中止し撤収します。そこから一か月首級会議を重ねますが、殺したい、でも殺せないという矛盾をどう解決させるか、これといった結論が出ません。最終的には一番重い流罪の佐渡へ流し、過酷な自然の中で衰弱し病気になり亡くなってくれば、自分たちが手を下した事にはならず、自分達に祟りは来ないという無理やりな屁理屈を立てて、何としても殺したいという幕府の思いを通そうとしています。この様に日蓮大聖人の61歳の生涯の全てが末法思想抜きでは成り立たない生き方と法門なのであります。

佐渡へ罪人として連行される旅の前日（文永8年10月9日）、日蓮大聖人は軟禁されている依智本間邸にて生涯最初の本尊を顕したと言われます。（立正安国会御本尊集目録No.1）この本尊は、

首題南無妙法蓮華経が紙面の下まで書かれ、向かって蓮華経の左側に日蓮花押向かって右上側面梵字愛染明王、この下に文永太才庚未十月九日、左上側面梵字不動明王の、日蓮大聖人の本尊の基本、骨格をなすものであります。この初筆本尊の骨格を見れば、日蓮大聖人は、この本尊に於いて一切衆生へ何を顕し何を伝えたいかが分かります。不動、愛染は、自然界の無量無辺では無く、心（生命）の三千大千世界の広さを表現しているという事が良く分か

ります。まさしく末法の衆生として妙法蓮華經の法に南無する信の大切さを示しているのです。
あります。

この本尊からNo.2文永9年6月16日佐渡へ渡ってからの本尊に、
首題南無妙法蓮華經の向かって右に南無多寶如来、左に南無釈迦牟尼佛
が、始めてはいります。これ以後、十羅刹女、鬼子母神、上行菩薩等四菩薩、
が、加えられ、文永11年7月25日No.13の本尊から、四天王が四隅に定められて来ます。
佐渡始頭本尊にも無かった、提婆達多、阿闍世王が入って来ます。そして重要な点は、ここ
で初めて、

大覺世尊入滅後二千二百二十余年

の、末法を規定する定番の表現が入り、この本尊から絶対条件として定着していきます。

日蓮大聖人は、佐渡へ渡り、身延曾存の佐渡始頭の本尊を顕しますが、この本尊にも未だ仏
滅後二千二百二十余年

の表記はありません。しかしながら、

如来滅後五五百歳始觀心本尊抄

という顕し始めた本尊とは何かを説明する為に、開目抄と共に、日蓮大聖人の法門の骨格を
なす重要御書五大部の一つを書かれます。つまり、本尊を顕す事と末法、本当に、1052年の
仏滅年から2220年は1271ですから、本尊初筆の文永8年と一致します。という事は、【二千
二百二十余年】と記述されていなくても、【二千二百二十年（1271）】に当たる深い自覚を
持って顕し始めた事が分かるのであります。

そして、末法の始め500年以内に、日蓮大聖人は、一切衆生平等成仏真實の法を明らかに
し、一切衆生に説き伝え広宣流布しなければいけない、又、出来ると考えたのであります。
しかし、「觀心本尊送状」（全255p）には、

「仏滅後二千二百二十余年未だ此の書の心有らず、国難を顧みず五五百歳を期して之を演説
す乞い願くば一見を歴來る輩は師弟共に靈山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつら
ん」

と示され、觀心本尊抄に本尊の理論はいかなく説き明かしたけれども、實際の確認、確証
は未だ現われていないと示されているのであります。つまり、この【此の書の心】が、本尊
に示される、

仏滅後二千二百二十余年

の表現は弘安元年4月21日No.48の本尊から

仏滅後二千二百三十余年

と変化し、花押もバン字から、ボロン字に変化して行きます。実際の

二千二百三十余年

は、1281年弘安4年でありますから、日蓮大聖人は3年前倒しして表現されているのであります。これは日蓮大聖人が自分の生きている内にと急ぐ気持ちと実際に、建治二年（1276）頃から富士熱原方面で不穏な事件事故が頻繁に起こり弘安2年4月8日には、駿河三日市場浅間神社分社に於いて信者四郎が傷害を受けるのであります。8月には弥四郎が首を切られ殺されます。日蓮大聖人は、一切衆生平等成仏の前提となる、【師弟一箇（日蓮と修行も学問も法難の経験も年数も、全てが違う熱原の農民が、この【末法】に於いて、日蓮と同じ【信】をもって、成仏を願い常不軽菩薩の生き方を貫こうとしている）】一切衆生平等成仏の条件は全て揃い、機は熟したと考え、前倒しし、弘安元年10月1日の「余は二十七年なり」の出世の本懐（宗旨建立）を宣言するのであります。これが【此の書の心】であります。その信仰心情の変化が【二千二百三十余年】【ボロン字】への移行変化に表されているのであります。日蓮大聖人の亡くなられた弘安五年（1282年）が、正しく【仏滅後二千二百三十年】なのであります。日蓮大聖人は自らの病気による衰弱も入滅も視野に入れ、覚悟し、生きている内に仏法の完全形を一切衆生へ示さなければ、【上行菩薩の再誕】の使命と責任を果たし、末法の本仏導師として、身をもって信行の手本、成仏の手本【常不軽菩薩の跡を継ぐ】と、師弟一箇の同じ【信】の志を抱き、同じ【常不軽菩薩の跡を継ぐ】成仏の境涯に立って貫きたい。この末法に於ける成仏の境地を末法の始め五百年を踏まえ、末法万年（永遠）広宣流布への支点と定めたのであります。御書としては残っていませんので、個人的な推測になりますが、日蓮大聖人が自らの死を覚悟した、弘安五年から、四年前倒しして、弘安二年（1279）の、熱原不穏の頃より本尊に顕した、【仏滅後二千二百三十年（1281）】の一年後の弘安五年（1282）十月十三日に臨終を迎えた事に、日蓮大聖人は深い信心の感慨と満足を持って受け止めたのではないかと考えます。

【仏滅後二千二百二十余年】の本尊は、【仏滅後二千二百三十余年】より劣り、拝するに値しないという事を言っているのではないのであります。どちらも日蓮大聖人の内証は同じであります。その内証の、確信、確証、確認を得る以前と以後の意識表記の違いを知るといふ事であり、日蓮大聖人自身が、【仏滅後二千二百二十余年】の本尊を否定していないという事実が、その事を自然に物語っていると思います。

この【二千二百三十余年】の表記は今日に至る迄、経過年数をカウントを加算される事無

く、身延日蓮宗系も大石寺も同様に【二千二百三十余年】と本尊に書写されています。ならば、日興上人が徹底して、日蓮大聖人以降の歴代貫主本尊書写係として、自分の名前花押を書かず、【日蓮在御判】として、日蓮大聖人の在位の立場で書写する事で辻褄が合いますが、自分の名前花押を書いてしまって、【二千二百三十余年】では、全く辻褄の合わない矛盾した本尊と言えない単なる恣意行為、自己顕示欲誇示の存在であるという事になってしまうのであります。

この様に、本尊の姿でも分かるように、日蓮大聖人の法華経を依経とした法門、そして、日蓮大聖人の生まれた時代、日蓮大聖人が、一切衆生平等成仏の法を求めた時代は、無仏、無教の【末法】という絶対の基幹条件を抜にしては成立しないものだったのであります。そして、日蓮大聖人は、この【末法】という絶対条件を守る事が、時代が進むとともに、教条主義と批判する者が現れて来ても貫き通したのであります。

承久の乱に於いて、天下の価値観はひっくり返ります。【天変地異】【飢饉疫癘】自然界の乱れによって、社会全体が塗炭の苦しみに混乱していきます。鎌倉幕府は初期の段階で権力闘争が起こり【自界叛逆難】一族、一門同士の殺し合いが起こります。蒙古から、属国になるよう書簡が届き、蒙古の巨大さも把握理解出来ていない幕府は、弘安2年の使者の首を博多において刎ねてしまい、完全な宣戦布告状態に入り、何時、どの様に、どのくらいの規模でやってくるか分からない九州防衛の為に多大な軍需費用と神経を使います。【薬師経】に示される七難、【仁王経】に示される七難、【立正安国論】で引用し、指摘した通りの時代になって行きます。信仰の世界も、一般社会も、これだけ現実に苦しまなければいけない実体験をしても、苦しみに慣れるにしたがって、天地がひっくり返ったわけでもないしと、末法思想は薄れていくのであります。現に【他国侵逼難】の蒙古が文永11年、弘安4年押し寄せても、内陸民族の蒙古の大將が上陸戦の方法に疎く、昼間に戦い、夜は夜襲を恐れ船に帰り寝るといった戦い方をした為に、嵐に会い、密集して停船している船どうしがぶつかり合い沈没するという一人相撲で撤退していくのであります。それでも日本は今の時代に至る迄第一次世界大戦も、第二次世界大戦も、スポーツの世界に至る迄、いざという時には神風が吹くと思いつけ、言い続けているのであります。撃退していないのに、撃退した様な成功体験。事実、日蓮大聖人も、「日蓮が他国侵逼難を訴えていたけれども、蒙古は退却して行ったじゃないか、日蓮の言っていたことは外れたじゃないかと」批判する輩が出て来ます。日蓮大聖人は、「敵の大將の首を取ったのか、他国侵逼難の根は残ったままである。」と反論するのであります。つまり、この様な反応も、長く続く末法思想にくたびれ慣れし、まあ

まあ、生きているじゃないか、暮らしていけるじゃないかという感覚が世論の主流になって行くのであります。

日本人だけでなく、人間というものは皆こうなのだろうと思います。1910年明治43年地球にハレー彗星が大接近しました。その時、日本中で当時では高価な自転車のタイヤチューブが爆発的に売れたそうです。一人で20本も30本も空気を入れ、ハレー彗星が大接近すると、空気薄くなり呼吸困難になるので、酸素ボンベ代わりに、タイヤチューブに入れた空気を吸って死なないようにするというのであります。貧しい階層の人達は、水に顔つけて、少しでも息が長くなるように訓練にいそしんだそうであります。しかし現実には、そんな事は起こりませんでした。次の日から何事もなかった夢幻を見たかの様に、世の中は、元の生活に戻って行ったのであります。現代社会の様な情報がない時代で、ガセネタの風説が真実の情報の様に思われて行くのは仕方がない事だと思いますが、情報社会になった近年でも、亘保愛子、美輪明宏、江原啓之、細木数子等々。大殺界、ノストラダムスの大予言等は世界中が大騒ぎし、何も起こらないと何も無かったように、何の検証も反省も無く、そんな事有りましたかという世の中になって行く。世の中が大騒ぎで盛り上がっている時に、矛盾している点を理論的に、どれだけ指摘しても、乗りの悪い変人の様に見られ言われる。集団洗脳、自己洗脳、集団催眠術に掛かる快樂を楽しんでいる様な世の中。情報がどれ程有る時代であろうと無かろうと、人間の性、業というものは鎌倉時代も同じだと思えます。

近年の【統一教会】の様に、宗教と言えないものが、宗教の名を語り、先祖の苦しみを救うには、多額な寄付をしなければ救われぬ等と、三世を見通す霊力が有るかの様に振舞い精神的に追い詰め、洗脳、マインドコントロールし、集めた御金で、政治、経済、情報等々を侵略して行くのであります。これは創価学会も新興宗教と評されるものは大小に関わらず、皆同じ手法を用いて人々の心、社会の機能をカビのように蝕んでいくのであります。政治家自身が、現実に集団結婚等という基本的人権を無視否定している長年の組織的行為を知らながら、遵法精神無く、権力欲を満たす為、御金と集票の乞食であるという事が次々と暴かれ眼の当たりにしなければいけない時代に放り出された様に思いますが、これがいつの時代も同じ、人間の性、現実に対して、日蓮大聖人は、天地がひっくり返ろうが、返らないだろうが、法華経に示される、釈尊自らが自らの力が及ばない妙法蓮華経の法を根本としなければならぬ末法であると断言している、事実と現実とは、そのまま受け止めなければいけない。それが末法万年（永遠）の法規となる。衆生が世の中の混乱になれ、不感症になっても、これを無視否定は出来ない。末法の時代が進めば進むほど、現在の混乱よりも、もっと広く、

根深いものになって行く事は必定である。何としても、釈尊が法華経の中で示された真実の一切衆生平等成仏の法を、何としても末法の始めの500年以内に日本はもとより、仏教伝来の恩徳を持つ中国、インドの人々に伝え広宣流布しなければならないと考えるのであります。その使命と責任と自覚が【如来滅後五五百歳始観心本尊抄】に、上行菩薩の再誕の自覚を踏まえて、末法の本仏の自覚の上に顕し始めた本尊の意味を明かす、この題名に如実に表現されているのであります。しかし、日蓮大聖人は当然500年も生きられません。広宣流布する法を一切衆生誰にでも分かるように釈尊の仏教の爾前の経の浅深、法華経の真意を明らかにし、何を本尊にすべきか、その本尊は何を顕しているのか、その事を揺ぎ無く完成した法門に示さなければいけないと考え、まさしく【如来滅後二千二百二十余年】丁度に上行菩薩の自覚、末法の本仏の自覚を踏まえて本尊を顕します。

しかし、これは日蓮一人の確信確認であります。仏教の究極の目的である一切衆生平等成仏の法には未だなっていません。そして、熱原法難の兆候の中で、本尊を顕し始めた初期から、日蓮大聖人は一切迷う事無く、上行菩薩は本尊の中に顕すけれども、常不軽菩薩は顕さないという、確固たる姿勢を取ります。つまり、【上行菩薩再誕】は日蓮一人の事、【常不軽菩薩の跡を継ぐ】は、日蓮大聖人を魁として一切衆生が法華経の行者として生きるという、この本尊に向かい信行学折伏する全ての【末法】の衆生で、【信】のみが全ての衆生こそが【常不軽菩薩の跡を継ぐ】者だから、本尊の中に常不軽菩薩の名を顕す事をしていないのであります。もう一重踏み込んで解釈すれば、首題、南無妙法蓮華経 日蓮 の日蓮が常不軽菩薩の跡を継ぎ、「菩薩の道を行じて、まさに作仏することを得べしと」の末法の法華経の行者として生き、人法一体の成仏の手本を示している姿が、首題の意味ですから、この日蓮の中に常不軽菩薩が具わっているのであります。ですから、常不軽菩薩の言葉存在自体は有りませんが、日蓮の中に具わっているのであります。反面、上行菩薩は再誕を踏まえて再誕に止まらず、菩薩を超え末法の本仏としての自覚の上で本尊を顕した訳ですから、上行菩薩の名は、妙法蓮華経証明菩薩として本尊に顕されているのであります。

これらの事から、あくまでも多宝如来も釈迦如来も上行菩薩等の四菩薩も、誰の脇士ではなく、全ての仏菩薩が、首題南無妙法蓮華経を証明する仏菩薩という脇士、自分たちの源は妙法蓮華経であるという事を、本尊の姿は顕しているのであります。

【上行菩薩の再誕日蓮】は、日蓮一人のみの上行菩薩の再誕の再誕の自覚と、末法本仏の自覚。を証明する道であります。

【常不軽菩薩の跡を継ぐ】は、日蓮大聖人を代表手本として、熱原農民を【末法】【信】

によって、法華經の行者となって成仏する事が出来る【汝等皆菩薩の道を行じて、正に作仏する事を得べしと】の、一切衆生平等成仏の契約を示す。本道なのであります。

【結び】

【明暗去来同時】世の中が混沌とした、不条理な暗闇に深く包まれた時代こそ、真実の妙法蓮華經の光は増し、闇を滅すと、「神力品」に説かれ、【日蓮】の【日】の理由にもなっています。現代迄の歴史様相を俯瞰した時、何度も暗闇に覆われても、法華經の教えが、闇を滅する程に光彩を放ったことは無かったのであります。日蓮大聖人の生きておられた時には、燈台の光の様に、螢火のようでも漆黒の海を航行する船が、それを命綱として、自分達の位置を確認出来る道標として、暗闇が深くなればなるほどその螢火の存在が、一切衆生平等成仏の法へ一切衆生を導く光になった事が有った事実を考えると、まったく、現代そういう事は無く、世界中の各界各分野の有識者と言われる人々のコメントの内容にも、法華經の法に共通する目覚めや発想は発信される事は無く、力無い過去の歴史分析の評論的知識の羅列だけでしかない。一方、法華經信仰者に類する人々は、決まり文句の【末法】だから【世の中に邪宗がはびこっているからだ】を言うばかりで、世の暗闇を正法流布の好機と捉え、一切衆生平等成仏の法を伝えようとせず、世の暗闇に埋没しているのであります。【末法】のせいでは無く、自分達が日蓮大聖人の真実の法を求めてと言いながら、集合離散を繰り返し、自分達の組織の維持繁栄を中心に考え、一番重要な日蓮大聖人の法門を理路整然と整理し明確に示し発信し、闇を滅し一切衆生を平等に成仏せしめる法の光は、これしかないと示す努力と実行が出来ないからこそ、世の中の闇に対して燈台の火となる事が出来ない所以であります。【末法】や【邪宗】のせいでは無く、自分達のせいと受け止めなければいけないのであります。一例を挙げれば、文中に於いても触れましたが、建長五年四月二十八日を【宗旨建立】等と思い込み言い続け、日蓮大聖人の法の宗旨が、いつ立てられ、どういう法なのかも分かっていない状況ならば、世間の闇以前に、自分達が闇にまみれている状態なのであります。

顕正会の様に、大災害、大地震、中国、北朝鮮の不穏な行動、ロシアの侵略戦争、地球温暖化、政治の混乱等々を広宣流布前夜の兆候だと、まるで喜ぶように論調し、顕正会員だけはいかなる災禍からも蚊帳の外で守られ、他人事の様に論じ、この混乱が極まった時、瞬時に、日蓮大聖人が英邁な貫主をつかわし、世界が一同に、日蓮大聖人の法に目覚め、天皇はじめ皇室全部が法華經の信仰者となり、天皇主権の本来の国家が出来上がり、各省大臣も全て、法華經の信仰者が就任し、理想国家が出来上がり、広宣流布が成就するのであるとい

う手品のような空理空論、実現不可能な夢幻の順縁広布を目標に掲げ、会員、世の中に訴え流言しているのであります。天皇はじめ皇室も全て末法の凡夫であります。広宣流布の暁で無く、今現在、自分の意志で法華経の信仰者になっているべきであります。天照大神を祖先神として神事を行って、信仰の道を間違っているものが、何故広宣流布の暁に突然法華経の行者となれるのか。日蓮大聖人は、天皇至上主義、王政復古論者ではありませんでした。軍国時代に感化された天皇現人神教育を引きずり私見を日蓮大聖人の法と混乱させ、会員に洗脳教育する事は一切衆生平等成仏の法を謗る事であります。この様な荒唐無稽、破綻した理想論は、キリスト教の【天国】と同じ発想であります。信仰は、一人一人が地に足をつけ現実の生老病死の生活を営みながら、常不軽菩薩の跡を継ぐ法華経の行者として生きる心に成仏を得る、逆縁広布こそが日蓮大聖人の法なのであります。信仰も成仏も広宣流布も瞬間出来上がるものではないのであります。【御肉牙】や【国立戒壇】の嘘で会員を煽る事は、日蓮大聖人の法である一切衆生平等成仏の法を狭小化する事であり、法華経の行者として間違った生き方であります。

【聖書】を中心にして営まれてきた、今迄の人類の歴史の、まやかしの【自由】【平等】【平和】では無く。又、第二次世界大戦で世界中で6000万人もの無駄な死傷者を出し、戦争には勝者も敗者もない愚かで惨めで悲惨な事だという総懺悔のもと国連が創設された。しかし、戦勝国に利権を与えるように常任理事国待遇を与え、自国に不利益の場合は拒否権を発動し、議論はデッドロックとなり何も決まらない、弾劾出来ない裁けない。大國小国の格差不平等を当然の事として、大国は原子爆弾を持って良いけれども、小国は持つてはいけない。という安全保障と言いながら、核の脅し、威圧によって服従を強いてバランスを保ち、それを平和と称して来たのであります。核拡散は望みませんが、何故、アメリカ、ロシア、英国、フランス、中国、インド、パキスタンは核爆弾を持って良くて、北朝鮮、イランは持つていけないのか、何故大国が指示出来る権利が有るのか、「私も持たないから、あなたも持つな。」子供でも分かる平等の理屈が通用していない不平等の考え方が、当然の様に物差しになっているのであります。ですから、現在のロシアの様な矛盾したウクライナ侵略戦争行動をしても、国連で、ロシアがどれだけ笑止な矛盾捏造情報で強弁しても、それをストップさせることが出来ないのであります。これらの現実も【聖書】を物差しにして、優れた者は劣る者を支配する権利を有するという、傲慢と差別、不平等を当然の事として認めて来た結果の現実なのであります。

これに反して、妙法蓮華経の法に示される、【森羅万象、全ての生命は本然として平等で

ある。それは人権としての平等よりも深い、全ての生命に平等に妙法蓮華經の仏の生命が具わって、全ての生命は全て成仏する資格を持っている。妙法蓮華經の仏の生命を覚知するには、妙法蓮華經の行者としての生き方をする事によって、誰もが仏になることができる】という、全ての生命が差別なく尊敬し合い、自分達の、愚かさ、弱さ、狡さ、卑しさ、未熟さ等々を自覚し、その上で、そんな凡夫でも、永遠常住の生命の繋がりの中で、本当の絶対の【自由】【平等】【平和】の法（物差し）によって、本当の世の中の闇を滅する事が出来るのである。という事を、常不輕菩薩の様に、ひ弱で、みすぼらしく、馬鹿にされ、軽んじられ、罵られ、惨めに見えても、示し、伝え、訴え続け、決して覇権主義でなく、他思想、他宗教の人々と共生し、【行道、不行道】を認め、寄り添い乍ら、世の中に妙法蓮華經の法を縁せしめ浸透させ、その人達自身に、自らの信ずる法が如何なるものなのか、立ち止まって考えさせ、自ら【信仰の寸心を改め】る覚悟を抱かせて行く事こそが、私達日蓮大聖人の法に縁した者の責任と使命なのであります。これからの末法の未来は、現代の暗闇よりも必ず深く重く拡大して行きます。その暗闇を暁によって滅して行くには、この妙法蓮華經の法を世の中の各種分野全般の基軸となる物差しにして進めていかなければいけないのであります。

B図右側の五百塵点劫から始まり、上行菩薩に付嘱し、【上行菩薩の再誕】日蓮大聖人に至り、妙法蓮華經の法に至る。釈尊主体の【証明道】の信仰と、左側の日蓮大聖人、【上行菩薩の再誕】の自覚【常不輕菩薩の跡を継ぐ】自覚の二要素を一体の要として始まる。【末法】と【信】を絶対条件として、一切衆生平等成仏が叶うという【本道】への切り替え。これを日蓮大聖人は、末法一切衆生平等成仏の未曾有の法として示してくれたのであります。

右側、左側を混同、混乱、混線させないで、末法の我々凡夫は、末法万年、左側の【本道】によってのみ成仏する事が出来るという法華經の行者としての生き方をし、縁する人々に妙法蓮華經の法を伝えていかなければいけない、義務と使命と責任を果たし、自他共に成仏し、三世常住に渡る、嘘、まやかしの空理空論【戒壇本尊絶体】【血脈絶体】【国立戒壇建立】の広宣流布では無く、本当の【自由】と【平等】と【平和】一切衆生平等成仏（広宣流布）していかなければならないのであります。

